

日光山沿革略記

全

149
578

017227-000-1

特20-657

日光山沿革略記

彦坂 諶照 / 編

M28.10

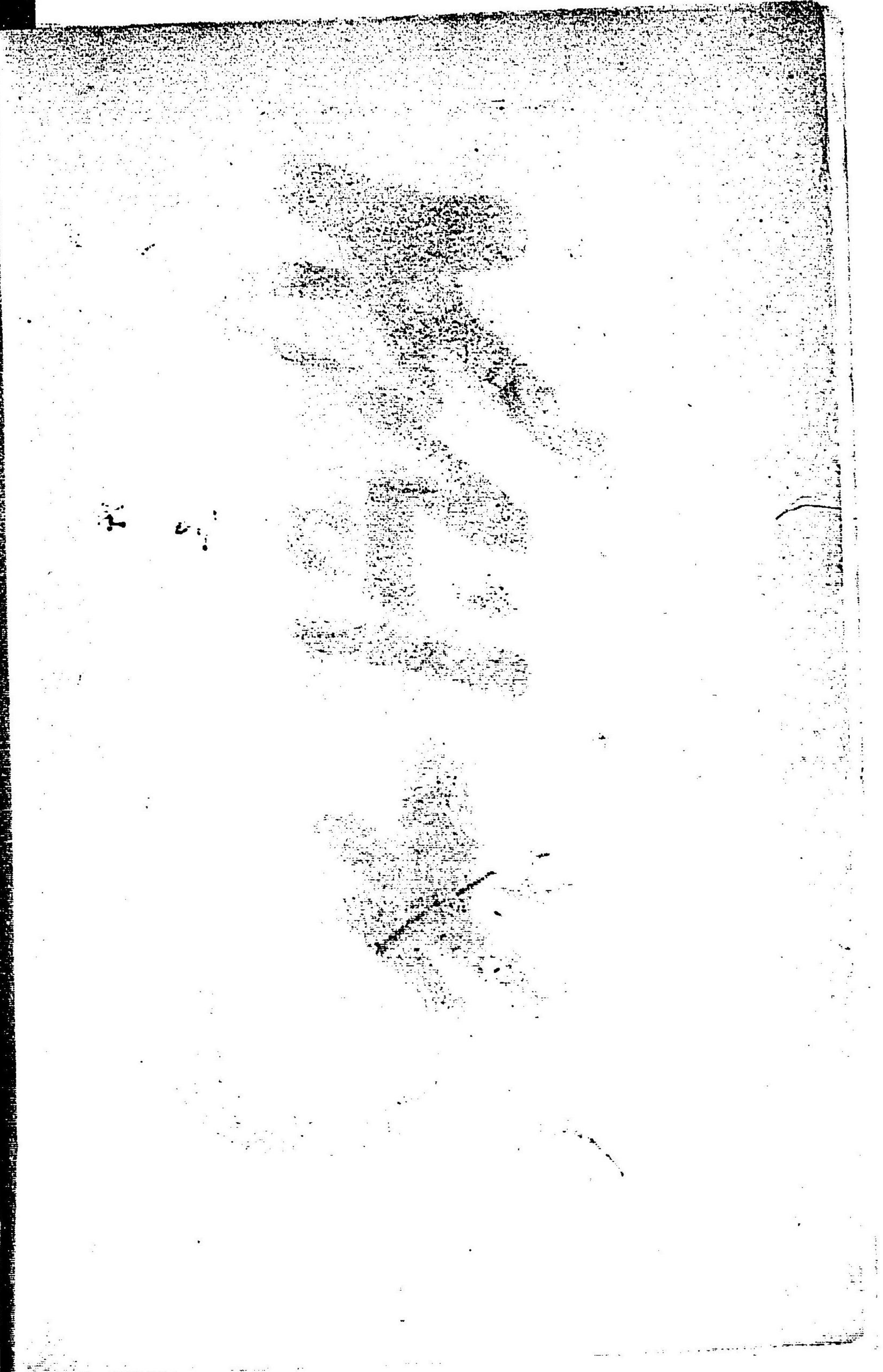
ABE-0604



特20
657



光



萬文

純之親筆



果茶分册



乙未新集

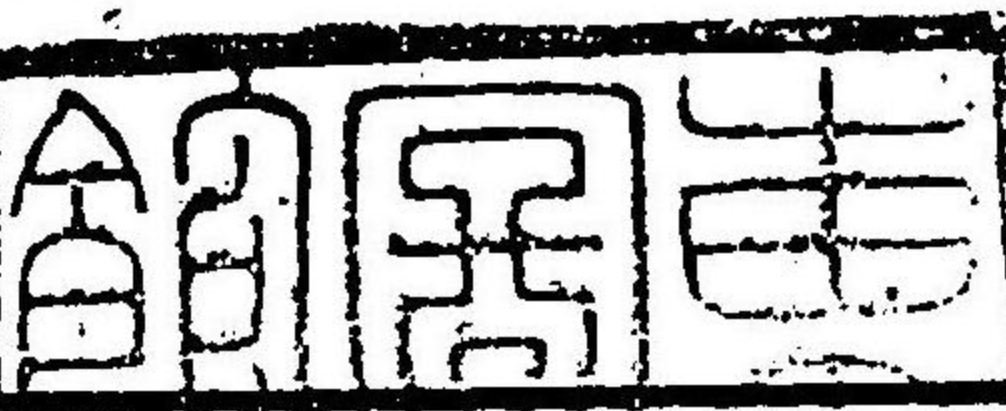
日光山沿革



日光山沿革畧記

晃嶺 彦坂 謹照 編纂

開山創業



勝道上人登嶺を企

天平神護二年三月勝道上人大谷川を涉り初て當山内に到り四本
 龍寺を創建す 上人俗姓は若田氏其先垂仁天皇第九皇子池速別命第十八世の
 千手觀音に祈る其母靈夢を感むて天平七年四月廿一日上人を下野國芳賀郡高岡の
 郷に産す幼名を藤糸といふ夙く出座の機あり勝寶六年藤糸を出流山の岩窟に籠り專
 心修行す念じ山中に就て剃度し法を嚴修朝と名け後勝道と改天平神護元年出
 流山の北麓に大嶺を築ち千辛萬難漸く練行す後之を巴の宿と名く王の加被力に依り
 谷川を渡り初て山内を建設せり
 神護景雲元年四月上人二荒の山頂を究めむと欲して果さず山の
 半腹地或は歌の濱に留宿すること三七日にして四本龍寺に還る是
 より山中に苦行すると殆ど十四年専ら二荒山を開闢して國家を
 利益せむとを念ず

二荒山を開く

中禪寺開基
同神社創立

封戸を賜勅
願所とす

神社創建

官費修繕

寺號寺料恩賜

二荒山上三社創立

開祖遷化座主の初

空海登山瀧尾創立
日光の稱

圓仁登見堂宇創立
鎮國道場

天台に歸す

天應元年四月上人宿志を果さむが爲山頂を究めむと欲して復た達するを得ず

同二年延暦元年三月上人特に大誓を發し奮勵して遂に二荒の山頂に達するを得一七日夜山上に苦行して四本龍寺に還る

延暦三年四月上人二荒の山腹湖北の地に立木觀音を手刻し寺を創して中禪寺と稱す又堂の側に一祠を設け山神を崇て鎮守とし中禪寺大權現と稱す

同八年四月勅使を當山に下して勝道の徳行を賞し特に勅願所と爲て封戸若干を賜又兩野總講師に任じ加るに上人位を以す同九年四本龍寺の側に一社を創設して二荒の山神を祭り寺中の鎮守と崇む後ち是を本宮大權現と稱す
大同二年上人請雨の靈驗あり名譽都鄙に聞ゆ尋で四本龍寺及鎮守社とも官費を以之を改造せしめらる

弘仁元年山徒叡願の命を蒙て靈驗あり勅賞して滿願寺の號を下し又法田若干を賜是より滿願寺を以當山の惣號とす

同七年勝道上人年八十有二四月二荒の山頂に登り初て山上に二小祠を設け中腹に一小祠を營む之を男體山三社大權現と稱す

同八年三月朔日勝道上人遷化す十餘人の徒弟あり其上足を教旻と云師の後を繼ぐ勅して大僧都に補し後又日光山の座主とす爾來代々の山主座主宣下を賜

同十一年七月空海上人大師弘法當山に來て瀧尾山を開き女體中宮を勸請して瀧尾山大權現と崇む尋て二荒の地名を改めて日光と稱す二荒日光國音近きが故嘉號に改めしなり

嘉祥元年圓仁和尙慈覺勅を奉じて日光山に來り三佛堂并に常行法華の二堂を創建して比叡山と同じく鎮護國家の道場となす此時勝道空海の徒都て皆圓仁の門下に屬し天台宗に歸す又座主

衆徒の開基

昌禪講師圓仁和尙と議り各徒弟を以三十六ヶ坊を開基せしめ之を日光山の衆徒と稱す座禪院等十八ヶ寺は昌禪の徒の開基に係る是より四本龍寺を以本院と爲通計三十七ヶ寺となる其總號を一乘實相院と稱す

新宮社成
日光三社定

同三年座主昌禪山衆と議り佛岩山恒例山常行堂の近傍に今東照宮神殿を新造して寺中鎮護の本社とし之を新宮大權現と云ひ或は満願大權現と稱し満願寺内の鎮守又日光大權現と唱是より四本龍寺の舊社を太郎山大權現の社とし改めて本宮大權現と稱し山内神本なるが故に新宮に對 瀧尾の女體中宮を加て日光三社大權現と稱す社なるが故に三社共渾て社務は日光山座主職の擔任にして三ヶ所各々別所を置き座主の命を受け衆徒茲に輪勤す之を三社上人と云

初て神職を
置

山内兵災

安元二年三月五日十六世の座主聖宣法印寂す豫て傳法の上首隆宣を以て後任と定む時に惠觀房禪雲と云者あり那須資滿の二男にして武力あり其族勢を恃むで強て十七世の座主となる然るに隆宣は常陸の大方政家が三男なりしが故に治承元年大方氏兵力を以て禪雲を逐却す那須資滿亦千騎を將えて大いに復讐を謀り戦ひ勝て禪雲を職に復せしむ此兩度の合戦に多く社堂寺院を燒き爾來漸々荒廢に就くと云日光開基已來 三百四十九年

本坊光明院
創立

延應二年座主辨覺新たに本院を建つ特に 勅して光明院の稱號を賜本坊四本龍寺は先年兵災に罹り 其號は終に舊跡の名稱となる當時現在寺院は左の如し
光明院 一山の本院座主職 所住寺にして其支坊即ち衆徒は三十六坊

本支名稱

なり

座禪院	三融坊	淨月坊	顯釋坊	遊城坊	淨土院	櫻本坊
教城坊	藤本坊	法門坊	光樹坊	佛眼坊	禪月坊	禪南坊
座寶坊	戒乘坊	觀日坊	惣持坊	十乘坊	道樹坊	善寂坊
妙法坊	寶藏坊	十地坊	普門坊	隨仙坊	大聖坊	實道坊
道義坊	圓實坊	惠乘坊	實相坊	日乘坊	城華坊	安樂坊
禪智坊						

已上孰れも大坊にして各領地を有し其最盛なる頃は各坊又附屬の小坊若干を有して大小通計するに三百坊舎の多きとありしと云惣山領地は下野國九郡の内都賀寒川河内に於て七十一郷其高凡十八萬石にて 桓武 平城 仁明 文徳 後鳥羽五朝の御寄附及ひ源頼朝卿又は宇都宮重綱忠綱等の寄進に係る且寺格は總本山延曆寺に亞ものにして衆徒は比叡山大衆と同等なり

皇族座主の初

延慶元年大僧正仁澄光山第二十八世の座主職に任じ光明院に住せらる大僧正は惟康親王の長子にして在職十一年と云皇族日光山初例なり

光明院座主職中絶

應永二十七年光嶺第三十七世の座主大僧正慈玄光明院の住職を辭す玄師は御堂關白實經公の九男にして曾師光山の座主職を解て已來光明院の住職暫く廢絶し爾來座禪院の住職代々御留守居權別當と稱して山務を掌る開山已來今茲五百二十三年にして初て本坊の主職を空す故に漸々衰運に向ふ悲憤に堪ざるなり今從前の列祖を左に掲ぐ

日光山列祖

開山勝道上人	座主宣下なきが故	二世教主晏僧都	三世主千如上人
座四世主神善上人	座五世主昌禪講師	座六世主尊蓮上人	座七世主明秀大德
座八世主聖兼大德	座九世主頼肇大德	座十世主慶眞大德	座十一世主明覺大德
座十二世主宗圓法印	座十三世主快舜阿闍梨	座十四世主有尋大德	座十五世主良重大德

十六世 聖宣法印 座主 十七世 禪 雲 座主 十八世 隆宣法橋 座主 十九世 觀經僧都 座主
 二十世 覺知大德 座主 廿一世 靜覺大德 座主 廿二世 文珍大德 座主 廿三世 相辨大德 座主
 廿四世 辨覺僧正 座主 廿五世 性辨阿闍梨 座主
 廿六世 尊家法印 座主 從三位頼家の子鎌倉將軍宗尊親王の御歸依僧にて南御堂を兼帯す是より代々貴族を以て座主に任ず
 廿七世 源惠大僧正 座主 是より代々座主鎌倉大御堂勝長壽院を兼務して多は鎌倉に居住す故に山務は其命を受けて御留守居座禪院之を取扱
 廿八世 仁澄大僧正 座主 鎌倉將軍惟康親王の長男 皇族 光山座主に任せられし初なり
 廿九世 仁慧法親王 座主 後嵯峨天皇第十四の皇子にして仁澄大僧正の法嗣なり
 三十世 道潤大僧正 座主 三十一世 聖慧權僧正 座主 惟康親王の第三子にして仁慧親王の法嗣なり
 三十二世 慈道法親王 座主 龜山天皇第十七皇子曾て背違院門跡に住せらる武元年日光山座主に任し光明院に轉住せらる
 三十三世 守慧大僧正 座主 聖慧權僧 座主 聖守法親王 座主 鎌倉滿氏の資
 三十五世 聖如僧正 座主 三十三世 聖守法親王 座主 鎌倉滿氏の資
 三十七世 慈玄大僧正 座主 三十五世 聖如僧正 座主 鎌倉滿氏の資

此後座禪院權別當左の如

權別當歴世

三十八世 監守 昌諭法印 座主 慈玄大僧正座主職中法印を以て本坊光明院を監守せし
 三十九世 監守 昌勝法印 座主 大僧正職已來御留守居權別當と稱して山務を執る
 四十世 監守 昌縉法印 座主 四十世 監守 昌潤法印 座主 四十世 監守 昌縉法印 座主
 四十一世 監守 昌源僧正 座主 四十世 監守 昌源僧正 座主
 四十二世 監守 昌顯法印 座主 四十世 監守 昌顯法印 座主
 四十三世 監守 昌宣法印 座主 四十四世 監守 昌顯法印 座主
 四十四世 監守 昌源僧正 座主 四十五世 監守 昌顯法印 座主
 四十五世 監守 昌顯法印 座主 四十六世 監守 昌顯法印 座主
 四十六世 監守 昌顯法印 座主 四十七世 監守 昌顯法印 座主
 四十七世 監守 若王丸 座主 四十八世 監守 昌勝法印 座主
 四十八世 監守 昌勝法印 座主 四十九世 監守 昌歆法印 座主
 四十九世 監守 昌歆法印 座主 五十世 監守 昌廣法印 座主
 五十世 監守 昌廣法印 座主 五十一世 監守 昌淳法印 座主
 五十一世 監守 昌淳法印 座主 是より先き山徒展々近國の武家と戦て法運漸次衰頽す淳法印在職中 天正十八年豊太閤當山の領地を沒收して山麓門前地の外僅かに足尾郷七百石の朱印を賜ふ故に坊舎年を追て減少し慶長十八年天海大僧正當山に貫首たりし頃は 大坊僅かに九ヶ寺を存し小坊も多く廢絶せしと云

天海僧正中

五十二世 監守 昌尊法印 座主 衆徒と異議あり慶長十八年終に退職す應永二十七年己來座禪院住職權別當と稱して山務を関すると十四代其年數百六十七年に断絶す
 五十三世 貫首 中興慈眼大師 座主 貫首 公海大僧正 座主 海大僧正の後守澄法親王より輪く
 五十四世 貫首 公海大僧正 座主 寺宮と稱す其歴代の後之を攝く
 慶長十八年天海大僧正 座主 慈眼光山の貫首に任じ光明院の住職を復
 興す此時幕府より今市及草久等の近郷を寄附す 舊領足尾郷七百石とな

東照廟創立

大樂院創立

衆徒十五ヶ寺と爲る

元和三年天海大僧正 勅を奉じて源家康公の遺骸を久能山より當山内に遷し東照大權現と崇む前年秋幕府の委囑に依り海僧正萬般を指揮して神廟を佛岩山に造營す此時特に一ヶ院を創立して大樂院と名け即ち東照宮の別當として専ら同社の祭司たらしむ

世人多く輪王寺法親王を以て東照廟の祭司なりと謂ふ誤解の甚しきなり抑も輪王寺宮は天台宗の管領職にして佛教各宗に冠たるの大權を有せられ佛法を以て王法を補翼し大に國家を鎮護する 勅願の大任を奉體して御職務の大體となしたまふ然れども東照廟の法儀等御所轄内に屬するを以て故に法門の大導師として其法席に臨御せられしなり其證枚舉に違わらず然るに其實を知らずして其法席大に不敬の言を咄き爲めに却て 皇威を凌す者あり大罪人と謂つべし

又 勅を奉じて東照廟の構内に薬師堂を新建す 薬師堂の建築及本尊開眼供養等の日

時も 朝廷特に陰陽寮をして之を選定せしめられ各宜旨を下し賜加之供養の當日には五畿七道に宣下ありて殺生を禁断し又大赦を行はる其 宜旨各通今現に輪王寺に藏す其後該堂に於て度々 勅會の大法會を行はせられ其都度大臣 公卿臨席ありて儀式最も嚴かなり東國に二なき名譽ある佛閣なり 今年幕府より高五千石の朱印を天海大僧正に賜 東照廟を山内に設くるに由る領地なる

元和六年是より先天海大僧正舊衆徒の持跡を再興し茲に至て大

俗人を置

相輪様創立
天海大僧正
遷化

領地加増
惣高壹萬石
衆徒廿ヶ寺
となる

坊十五ヶ寺となる 衆徒の領或は二百石或は百五十石或は百石を配當す 且つ漸次に已前の小坊を復興し之を一坊と稱して終に八十ヶ坊を存するに至り東照廟及薬師堂の番役に從事せしめ 一ヶ坊の料高五石宛と定 從來の社家六人を東照廟に兼勤せしむ 其領百石或は五十石或は三十石宛を給せらる

寛永十四年初て當山に俗人を附せらる 本坊并に衆徒の家來或は社人の二男等を召出され二十軒となる

同廿年天海大僧正山内に初て相輪様を建つ十月二日大僧正遷化す遺言に依り山内大黒山に埋葬し拜殿及影堂を建て後之を慈眼堂と稱す天海大僧正の資毘沙門堂門跡公海大僧正其跡を繼ぎ山務を掌る此年更に一寺を新建し無量院と號して慈眼堂の別當と爲該堂に専仕せしむ其領高三十石

正保二年幕府より更に貳千九百石を加附して惣高壹萬石の領地となる此年舊衆徒の遺跡五ヶ寺を再興して通計二十ヶ院と成し坊號を改めて悉く院と稱し寺領を平均して壹ヶ院の高百石宛とし

東照廟宮號
宣下

天海僧正
大師號宣下

外に學頭一ヶ院を新設して修學院と號し其寺祿を三百石とす是より先寛永年中釋迦堂に別當所を設け妙道院と稱し其領二百石後又新宮別所に常上人を置き其號を安養院と云同年十一月東照廟に勅して宮號を賜翌年より毎歲殊に奉幣使を遣さる之を例幣使と云

慶安元年四月十一日 勅して天海大僧正に謚號を賜ひ慈眼大師と稱す 勅使五條少納言菅原爲庸朝臣當山の廟前に參向して宣命を傳へらる

宣命曰 勅功者。隨行允貴。美譽永傳。德者依道。自彰芳聲。遠聞眞俗。不異和漢。惟同。故大僧正法印大和尚位天海。解通經論。學兼顯密。住台嶺而董衆。擊日光而祭神。泛大慈之航。拯沒溺於彼岸。研正智之双。退障碍於遐方。久保龜鶴之齡。能振龍象之質。奄達衆望於禁闕。得施崇號於遠邦。謚號慈眼大師。可依前件主者施行。

大猷廟創立

領地加増
惣高壹万三
千石
社寺料配當
高

皇子臨御
輪王寺號
勅賜

慶安元年四月 日

同四年四月二十日德川三代將軍家光公薨す同五月六日山内字大黒山に埋葬し 勅して大猷院と稱す尋で廟堂建設及供養の日時等都て陰陽頭 勅を奉して之を選定し一々 宣下したまひ殊に勅額を下し賜此時龍光院を創建し之を大猷院の別當所と爲し廟務に專任す此年幕府より更に高參千六百石餘の土地を寄附せられ總高壹萬參千石餘となる此内譯左の如

- 合高八拾七石 今の二荒山に屬する諸神社六ヶ所の料
- 合高五千百六拾六石餘 東照宮諸料
- 合高貳千參百七拾石餘 三十一筆合計高
- 合高六千壹石餘 大猷廟諸料
- 本坊學頭兼徒等諸寺院料

承應三年公海大僧正寺務を辭す一品守澄法親王其後を繼ぎ爾來日光山門主として東叡山寛永寺を兼董し且つ天台一宗を管領せ

らる親王は 後水尾天皇第三皇子今宮御方にして寛永十六年豫て日光山門主として御下向の御契約あり正保元年青蓮院尊純法親王に就て薙染せられ同四年關東へ御下向慶安元年二品に晉み同二年更に一品に榮轉し茲に至て日光山の貫首に任じたまふ此年特に 詔して日光門室を改め號を輪王寺宮と賜ふ爾後歴代左の如

輪門御歴代

貫首	五十五世	守澄法親王	後水尾天皇第三皇子 承應三年御受職延寶八年御受職
貫首	五十六世	天真法親王	後西院帝第五皇子 延寶八年御受職
貫首	五十七世	公辨法親王	後西院帝第六皇子 元禄三年御受職享保元年御受職
貫首	五十八世	公寛法親王	東山帝第三皇子 正徳五年御受職元文三年御受職
貫首	五十九世	公邊法親王	中御門帝第二皇子 元文三年御受職寶曆二年御受職
貫首	六十世	公啓法親王	中御門帝御養子 寶曆二年御受職天明八年御受職
貫首	六十一世	公遵法親王	安永元年九月廿七日薨隨宜樂院宮と證

本支寺名

當時山内寺院は左の如 附言此院日光東叡之天台の三本山と稱して同等の寺格とす

貫首	六十二世	公延法親王	桃園帝御養子 實徳院宮典仁親王御子 安永九年
貫首	六十三世	公澄法親王	桃園帝御養子 伏見宮邦親王御子 寛政三年
貫首	六十四世	公舜仁法親王	光格帝御養子 有栖川宮龍親王御子 文治六年
貫首	六十五世	公紹法親王	光格帝御養子 有栖川宮親王御子 天保十四年
貫首	六十六世	公慈性法親王	光格帝御養子 有栖川宮親王御子 弘化三年
貫首	六十七世	公現法親王	仁孝帝御養子 伏見宮親王御子 慶應三年
貫首	六十八世	公明法親王	明治二年十月四日伏見宮親王御子 慶應三年

本坊	輪王寺	御住職	學頭	修學院	權僧正より大僧
衆徒	養源院	慧乘院	華藏院	法門院	護光院
	醫王院	禪智院	教城院	櫻本院	南照院
	日増院	遊城院	唯心院	淨土院	觀音院
	光樹院	照尊院			實教院
東照宮	大樂院	大猷廟	龍光院	釋迦堂	妙道院
別當		別當		慈眼堂	無量院
				新宮	安養院

一坊 八拾箇坊 承仕 三箇坊

合計百拾箇寺

日光革命端緒

慶應四年四月舊幕旗下の士追々江戸を脱し當山内へ集るもの三千餘人及ぶ廿九日官軍之を撃退せむが爲字十文字の日光今市に於て接戦あり此時山僧等衆議して來集の士を説くに當山に依り官軍に抗するは神廟の爲甚だ利ならざる旨を以てし且つ一山總代櫻本院道純安居院慈立を十文字に派遣して官軍の先鋒谷守部氏に懇談す因て官軍は今市の本營に引揚脱兵は卒に奥州に向て退散す

輪門主御復 歸 三門室の管轄

寺領日光縣の所轄と成

明治元年十月當門主公現法親王 勅詔に因り御生家伏見宮御方へ御復歸爾後 朝命を以三門室 栗田 大佛 に於て天台一宗を管轄す是より日光の山務は三門室の命を受けて輪門室監守の院家之を閱す是より先新に日光縣を置かれ總山領は渾て該知縣事の支配

輪王寺中絶 本山號廢止 學頭代を置

神佛分離

山僧合併 院坊廢止 一寺を存

に歸す

同二年十一月輪王寺の稱號并に日光東叡の本山號を廢止せらる茲に於て三門室より改て當山に學頭代の職を置き山務を擔任せしむ醫王院覺潤養源院生戒其職に就く

明治四年一月八日日光縣より當山神佛分離社寺廢立の御處置を達せらる 慶應四年三月王政復古新たに神祇官を設けられ神佛の習合を廢止せらるるの發令ありしも當山よりは特に開闢已來の事由を上陳せしにより終に遷延して今日に至り改て分離廢合の令ありしなり 曰く社寺其地を區分して僧侶の神勸を停止し神社に屬するものは都て舊社家に引渡し各僧侶は皆舊本坊の一寺に合併して院坊區々の稱號を廢し單に滿願寺の號を用且つ神地内に在る堂塔は悉く滿願寺附屬地へ移遷すべしと 日光山中の神

社は都て開山勝道已來の勸請にして僧徒の經營に成り悉く大權現と稱し千有餘載の久しき法祭を専務として歴朝の御信仰も淺からざりしとなれば此神佛判然の際單純の法祭に歸せざれば則分離して却て混稱するの恐あり故に至當の御處分相交々其筋へ斡旋せしむ其意貫かず終に這回の命を受るに至る千載未曾有の一重大變革山僧等悲嘆自ら禁じ難く其動搖殆ど名狀すべからず茲に於て縣廳より三門室執

事禮那院韶舜を出張せしめ鎮撫の勞を執らしむ且つ知縣事よりも慰諭周到終に其局を結ぶ抑維新の始め山僧等奮發して危險を陥み脱兵を説き官軍に申し彼の十文字の血戦を止めざりしかば管内に鮮血の穢を見るのみならず海に惜むべき無雙の壯觀も倏ち熾災に罹る勢ありしなり况や無縁にして祭典法儀悉く舊式を存し維持すると満二ヶ年其艱苦幾許ぞや法の爲道を守るの精神自ら茲に至て新宮僧家の本分なりと雖今此不幸に陥る實に痛哭に堪へざりしなり

を二荒山神社と改稱して本宮瀧尾中禪寺及連峰祭祀の諸社悉く之に屬し東照廟も權現號を廢し單に東照宮と唱て俱に舊社家の司掌する所と爲り翌年に至り二荒山は國幣中社東照宮は別格宮幣社に列し俱に舊社家を廢して宮司禰宣主典を置き此に従事せしめらる

廣く山中に散在せる數十の佛堂は皆滿願寺に屬し學頭登簡衆徒院二十一坊八承仕坊三箇渾て舊本坊に合併し各院各坊の稱號を廢し其寺地は奉還して百拾ヶ寺ありしもの僅かに滿願寺の一寺となる滿願寺の號茲に至て總號にあらず自ら單に一ヶ寺の名稱尋て當分廩米百石を賜はるの恩命あり

同年五月十三日滿願寺自火燒失八月學頭代覺潤職を辭し翌年春學頭代生戒又辭職す後任を栃木縣廳より舊龍光院山貞に命ぜら

滿願の一寺
號に歸し廩
米百石を賜
滿願寺燒失

る

同六年春波之利大黒天を東京淺草に開扉して不慮の害を受莫大の債を負寶器什物も一時危険に罹る同八月學頭代山貞職を辭す寺衆の願に依て縣廳より其後任を舊護光院誥厚へ命せらる乃ち寺務を改革し償債の方法を設け寶物什器を復還す又神地内の佛堂其轉地すべきものと其据置くものとのを辨別し之を官に申請し因に滿願寺再建の方法を歎願して俱に許允を蒙翌年秋に至り粗再建を成就す

學頭代を執
事と改む

滿願寺再建

學頭代交迭

波之利大黒
天開扉大負
債

滿願寺兼務
を置く

明治七年七月學頭代の名稱を執事と改め更に副執事を置き關口慈立之に命ぜられむとを縣廳に出願す因て縣廳より改めて彦坂誥厚を滿願寺執事に關口慈立を同副執事に命ずるの辭命書を與へらる

同年十二月東京市谷自證院住職少教正修多羅亮榮を滿願寺兼務

相輪様轉地
山内舊寺地
拂下

三佛堂轉地
起工

聖上御臨幸

御手許金下賜

に出願せしに依り内務卿より其指令を賜月末晉山才執事故の如
し
同八年相輪様を今の地に移す此年三月山内舊各院各坊の上地に
係る寺地合反別二十九町歩滿願寺合併僧徒各自に割り拂下を請
願して許可せらる謙厚負職已來山内舊寺地を拂下あらむとを出願すると再三
然れども皆願書を却下せらる昨年春又特に出願し涙を揮て
切に哀願す因て僧侶各自の原籍地として拂下を願ひ然るべきの内意あり乃ち其意
に依出願して許可あり此舊寺地拂下の舉や蓋し他日本坊支院の復舊を企圖するが
爲なり

同九年三佛堂今の輪王寺本堂なり轉地に着手す山麓市民苦情を鳴して之を
拒み大に葛藤を生ず同年六月

今上陛下當山へ御臨幸 辱なくも滿願寺を以 行在所とせられ
兩日三夜 御駐鞞宮内省より金三百圓を賜り八月に至て更に
御手許金三千圓を賜り三佛堂移遷舊觀を失はされとの恩命を蒙
る

譚光院再興
寺中の名稱
起る

滿願寺副住
職を償

滿願寺兼務
を解く
三佛堂落成
再興慶讚會
滿願寺正住
職任命

同十二年四月十日願の通護光院再興聞届らるゝ旨栃木縣廳より
指令を賜官令に依り改めて滿願寺々中と稱す滿願寺の號
は茲に至て支院を有すれば本坊の號となれり

同年五月六日栃木縣より大講義彦坂謙厚へ滿願寺副住職申付ら
る兼務救正並に寺衆
一同の願に依る

同十三年十一月願の通中宮祠境内の立木觀音堂妙見堂東照宮境
内の藥師堂輪藏五重塔深砂王堂瀧尾境内の彌陀堂千手堂皆堂内
に於て舊の如く佛事執行を許可せらる尋て藥師堂等の本尊還座
供養を營む

同十四年九月中教正修多羅亮榮願に依り滿願寺兼務を免ぜらる
同年十一月三佛堂遷地造營落成に依り五日を卜して本尊正遷座
式を兼慶讚會を執行す
同十五年五月十一日寺衆並に末寺等の願に依り副住職大講義彦
坂謙厚を以滿願寺正住職に任し其指令を内務卿より賜

滿願寺寺中
十四ヶ寺再
興

輪王寺號復
稱
本坊滿願寺
を改めて輪王
寺と稱す

同年八月八日願の通舊衆徒十一ヶ院一坊三ヶ坊再興の義栃木縣
令より聞届の指令を賜官令に依り改めて一般其稱號左の如し

法門院 安養院 華藏院 照尊院 南照院 禪智院 淨土院
醫王院 櫻本院 光樹院 唯心院 教光坊廿五年願濟道福坊

廿五年願濟 金藏坊日全増院と改
實教院と改 已上外に護光院は去る十二年再興茲に至て滿願寺
寺中拾五ヶ寺と成寺格は宗内十五等大寺とす

明治十六年十月五日本坊輪王寺舊號復稱の義願の通聞届られ栃
木縣令より其指令を賜ふ此時伺濟に依り自今本坊の滿願寺を以
其儘輪王寺と稱し滿願寺住職を以其儘輪王寺住職とし且つ滿願
寺の號も千古の名稱なれば當山寺院の總號として存し置き本支
共同の祈禱札守卷數等には之を用ふるも妨なし併し事務上には
一切用ゐざるとなれり茲に於て本坊を舊の如單に輪王寺と稱
し十五ヶ院を輪王寺々中と稱す輪王寺復稱のと蓋し偶然にあらざるなり
明治元年五月十五日已來の事件は昔時の

輪王寺門跡
由緒

執權者の錯誤に出でしものにて輪門宮御方には聊かも願延へ對し御二心なく却
て深くの皇室の爲御苦慮あらせられし事實は後日明白に願れしなり然るに一時執
權者の失策より延いて守澄法親王已來連綿相續せる公然官軍に抗抵せし與羽諸藩
其芳躅を溼滅せしむるは實に忍難きの極なり況や公然官軍に抗抵せし與羽諸藩
も悔悟謝罪の後再華族に列せられ優渥の聖代に於て袖手すべきにあらず故に其筋へ
る等古今内外に比類なき寛仁優渥の聖代に於て袖手すべきにあらず故に其筋へ
歎願手を盡しなり此
官許を蒙りしなり

輪王寺門跡由緒左の如し

慈眼大師傳記寛永十年日告紫禁之闕請第三宮以爲日光山門
主于時鳳雛甚妙齡也此故延光臨之淑裝海師豫表聞 家光公曰
他日必令此宮爲一品親王而冠諸宗上

日光山列祖傳卷下親王傳法日慶安元年詔爲二品臨御日光二年
轉進一品美聲洋々承應三年有院宣改日光門室賜號輪王寺
宮嚴有院殿御判物日下野國日光山東照大權現宮領壹萬石大
猷院領三千六百石餘都合壹萬三千六百石餘別錄在事寄進畢中
其上招請 皇子於當山被立置宮門跡但新建江州坂本滋賀院定

輪王寺寺格を別院とす
門跡號公稱

爲皇子入室之處末代永不可令退轉也云
同上日光山條目曰一當山門跡後住之事江州滋賀院以執奏皇
子從幼少時入室學問修行成長之節關東下向先有居住東叡山隱
居所而法流相傳以後移本院而日光住持可有與奪云
東叡山御本坊舊記 守澄法親王御傳曰明曆二丙二月二十八日
山門日光東叡三山者爲一宗總本寺輪王寺宮可有管領之旨其外
天台宗諸法度被準慶長十八年二月二十八日同年八月二十八日
兩御先判之旨從將軍家更被進之
同上解脫院宮天真親王御傳曰御諱幸知同年元寶十月七日御得
度于滋賀院從此稱日光新宮爾後輪王寺代御附弟
同十八年一月十九日今古を酌量し輪王寺を特に別院の地位に班
列せしむる旨天台座主より辭令あり
同年十二月九日內務卿へ伺の通門跡號の公稱を許可せらる

門跡寺院參
內拜賀

廿一年十二月廿五日明年一月己降二府東京三縣枋木奈良の門跡
三十ヶ寺院の住職在京の節は拜賀參拜 仰付らるゝ旨宮内大臣
より告達の趣枋木縣知事より當寺へ傳達せらる依て當門主謹厚
權大僧正年末に上京して翌年一月二日參 內拜賀し三日 賢所
に參拜す

維持元資を
賜

明治二十三年三月宮内省特別の詮議を以輪王寺維持費の内へ金
五千圓を賜先年輪王寺所有地合反別十六町步餘立木と俱に御料局へ
元資増殖方法なるものを編み増殖の元資拾萬圓に滿るを以て目
的となし枋木縣廳の認可を得て爾來之を實踐す

上地官林委
托

同廿四年九月廿八日先年の上地に係る官林字御堂山六拾町三反
三畝九步字慈眼堂山三反三畝九步字瀧尾河原五町壹反五畝廿七
步總合反別六拾五町八反貳畝拾五步願に依り輪王寺へ委託せら
る

同廿五年四月廿五日天台座主より特旨を以寺中拾五ヶ院を三等別格寺に昇班せしめらる茲に於て比叡山各坊と同一寺格に復す同廿七年輪門歴世法親王御靈殿新築の官許を得亦文庫を經營す維新後の事務擔任者を一目表に列記すれば左の如

六十八世 監守	大僧都 慈亮	舊權大僧都 覺潤	舊權大僧都 生戒	舊大僧都 山貞	大講義 誥厚	中教正 亮榮	大僧正 誥厚
舊華藏院住職 維新前より輪門室の御留	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より
舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より
舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より	舊山學頭代職 明治三年三月三日入室より

當門主誥厚權大僧正の履歴は維新後寺門の沿革に關係あれば今

略して左に之を記す

僧正は信州長野の人なり父は藤井穀昌母は小泉氏天保五年正月廿五日を以て生れ年十二にして日光山護光院十二世大僧都誥貞を師とし薙髮す十三歳四度の加行を修了し十七歳三部の灌頂を成満す廿二歳天台管領宮一品慈性法親王の令旨を奉し法兄護光院十三世誥常の後を承く明治四年當山神佛分離の官令に依て衆とて護光院の稱號を廢止せられ舊本坊に合併す三十五年同五年教部省の辭令を以權訓導に補し其冬本宗管長の命を奉し岩磐及陸前の三國を巡教し翌年春復命するに及で訓導に轉ず同年九月地方廳より滿願寺學頭代を拜命す七年少講義に進み十二年大講義に超遷し滿願寺副住職に任す十五年副を轉して正と成り權少教正に補す四十九年十六年輪王寺の稱號を復興し同十七年第十九號の官令を以て教師住職の任免一に

其宗の管長に委らるゝに因て本宗管長より更に僧正に補せられ同二十年廣學堅義遂業の後權大僧正に進み同廿五年九月天台座主より往時慈眼大師の被着したまひし古錦七條袈裟を贈與せられ廿八年五月大僧正に轉す今左に袈裟を贈るの牒を記す

日光山輪王寺門跡

權大僧正 彦 坂 誥 厚

維新ノ沿革ニ晃嶺將ニ廢滅ニ歸セントス其期ニ當リ誥厚權大僧正者衆ニ擢テ拮据眈勉夙夜ニ心ヲ竭シ遂ニ眼祖ノ偉業ヲ恢復シ從テ扶桑第一ノ名藍勝區ヲ現存セシメ又々輪王寺ノ室ヲ興シテ大師ノ法燈ヲ繼承セリ今茲二百五十回ノ御忌ニ相當ス亦偶然ニ非ス抑明治ノ初ヨリ今ニ至ル一意專心以テ晃山ノ美ヲ輝ス茲ニ其功ヲ嘉シ本山ニ傳來スル大師被着シタマウ七條

袈裟一領ヲ贈リ其勳績ヲ賞ス宜シク其山ニ傳テ永ク護持スヘシ

明治廿五年九月四日

天台座主延曆寺大僧正三浦實源

同二十六年十月本縣下宇都宮町に於て一府東京府六縣神奈川千葉埼玉栃木群馬茨城勸業共進博覽會を開くに先だち本縣廳より當山社寺に懇談の旨あり曰く遠近の有志者我縣下に來會するの時に際し日光社寺の寶物を展覽せしめば大に人智啓發の益あらむと茲に於て當寺の什物并に附屬諸堂の寶器をも一所に展列して初めて庶人の拜覽を許すととなれり

日光山沿革略記尾

附言

此記ハ明治甲午十一月内務省社寺局中山寺院課長ノ請求ニ應シ編成セシモノナレバ固ヨリ事實ヲ主トシテ文彩ヲ意トセス故ニ其起原沿革ノ事蹟ニ於テハ最モ確實ナル山史及ヒ舊記ニ據リ近今ノ記事ニ至テハ都テ現見ノ實際ヲ載ス偶タマ或人觀テ以テ史家ニ裨益アリト

爲シ之レガ刊行ヲ憇憑ス因テ藍田先生
ノ一覽ヲ煩ハスニ先生之ヲ觀且ツ卷末
ニ一言ヲ題セラル予大ニ喜ヒ即チ或人
ノ憇憑ヲ容レテ剗削ニ命ズ仍テ茲ニ其
事由ヲ附記スト云爾

時明治廿八年三月

晃嶺 輪王寺門跡執事謹照



日光山之闢也。邈矣。勝道
上人。出於垂仁帝之遠裔。
夙脫塵界。優入法域。攀險
峰。涉大川。創建四本龍寺
於山中。距今千有餘歲。實

天平神護二年也。日光絕頂曰男體山。高聳雲霄。人跡所不到。上人披荊棘。馴猿鹿。拮据經營十四年。始達其巔。於是祀男體山神為鎮護。延曆中。天皇遣勅

使。賞其功德。以寺為勅願所。賜封戶若干。此為開山太祖矣。弘仁元年。山徒奉勅祈禱。有靈驗。因賜滿願寺號。賞寺田若干。延慶中大僧正仁澄為坐主。惟康

親王長子。此皇族為坐主
之始也。元和中。天海僧正
奉勅。以幕府囑。建東照公
廟。每歲勅使奉幣。謂之例
幣使。寺權益大。此為中興
矣。慶安中。將軍家光公薨。

葬之。見山。建廟。號大猷院。
於是幕府所賜祿。至一萬
三千餘石。公海上人。兼天
海後傳之。守澄親王。親王
為後水尾帝第三子。號之
輪王。寺宮兼領東叡山。為

天台一宗長。自此十二世。皆以親王為晃山主。寺格自崇矣。慶應之役以後。親王復歸本族。悉收寺祿。為縣令所轄。明治四年。神佛分離之命下。廢支院一

百十寺。置滿願寺一字。無幾。本寺亦罹災。於是晃山衰頹極矣。諶厚上人。為衆所推。奉官命。奮執寺務。償舊債。復寶器。移佛堂及相輪櫟。再建滿願寺。且請官

復寺地若干畝。九年。車
駕幸晁山。駐輦三夜。賜
金三千圓。勅勿墜舊規。
十五年。謚厚受內務卿命。
為滿願寺住職。再興支院
十有五寺。改本院稱輪王
寺。尋復門跡號。見許參內
拜賀。廿三年。特賜金五千
圓。充輪王寺維持費云。嗚
呼。晁山始於勝道。盛於天
海。二師之德可謂大矣。及
其衰也。有若謚厚上人出

焉。艱蹇崎嶇。耐忍不倦。遂蒙天眷。略得伸志願。其功亦可謂偉矣。蓋冥冥之中。有靈助者。非耶。余與上人親善。其徒權大僧都。諶照。來示此卷。觀畢。題其後。

還之。

明治廿八年二月書之
東京觀光園南窓
肥前 藍田谷口中秋



附錄 輪王寺什寶目錄

佛像佛畫之部

佛像ニアラザル羅漢或ハ居士ノ像ト雖諸先德或ハ佛工佛畫師ノ手ニ成ルモノ及ヒ名號舍利塔ノ類ヲモ總ヘテ此部ニ攝ク

一開山上人御作藥師佛御木像 坐像總丈二尺厨子ニ入

上人延曆三年二荒山ノ半腹ニ於テ桂ノ大樹ヲ得テ立木ナガラニ千手大士ノ尊像ヲ手刻セラレシガ後チ歌ケ演ニアリテ彼ノ餘木ヲ用テ件ノ藥師ノ尊像ヲモ手刻セラレシト云觀ルモノ其妙作ニ驚カザルナシ今チ距ル凡一千百餘年

上人諱ハ勝道當山ノ開祖ニシテ當國芳賀郡ノ人姓ハ若田氏垂仁天皇第九ノ皇子池速別命十八世ノ孫高藤介ノ子ナリ天平七年四月廿一日ニ生レ天平寶字五年正月當國藥師寺ニ於テ鑑

眞和尚ノ上足如意慧雲ノ二律師ヲ拜シテ薙髮ス時歲二十七天
 平神護元年九月始テ當山草創ノ大志ヲ起シ深雪ヲ踏ミ險巖ヲ
 攀テ山ニ采リ澗ニ汲ミ苦修練行スルヲ十數年卒ニ天應二年三
 月ヲ以テ荒ノ山巔ニ達スルヲ得テ茲ニ開基ノ鴻業ヲ遂ゲタ
 リ後チ弘仁八年三月一日ヲ以テ示寂ス壽八十三今ヲ距ル一千
 七十八年

- 一 弘法大師御作不動尊御木像 坐像丈貳寸 臺座高七分五厘 壹體
- 一 古銅懸佛 出形銅版ニ佛體ヲ打 三體
- 一 古減金懸佛 丈貳寸五分 五體
- 一 古懸佛 一ハ鍍金徑壹尺ノ圓形一ハ 貳體
- 一 古銅懸佛 前柄木縣知事折田平内氏ヨリ 壹體
- 一 古銅佛 坐像丈 四寸 同
- 一 慈眼大師護持銅製誕生佛 丈四寸 五分 同

- 一 古銅誕生佛 丈三寸餘 荷葉盛附 同
- 一 釋尊苦行之御木像 丈壹尺三寸 臺附 同
- 一 同 入涅槃御木像 橫臥丈四寸餘 須彌壇附 同
- 一 慈眼大師護持降魔大師御木像 丈五寸五分 同
- 一 化石彫刻俱利伽羅不動尊御像 巾六寸 同
- 一 古代製青磁觀世音尊像 立像丈 八寸 同
- 一 蕾蓮花ノ三尊佛 木製蕾蓮花ノ中彌陀三尊佛ノ立像丈壹寸四分ナル 三體
- 一 圓搭如意輪尊像 唐銅坐像總丈壹寸壹分 壹體
- 一 維摩居士木像 坐像高三尺ニシテ厚貳寸ノ臺座アリ須彌壇上ニ之ヲ安ス 同
- 一 鑑眞和尚將來蓮座形舍利塔 徑四寸五分高五寸木製極彩色上面佛舍利ヲ納ルハ凹處及ヒ器ハ金屬ヲ以之レテ 壹體

傳云此塔ハ印度古代ノ製ニシテ 聖武天皇ノ御宇鑑眞和尚ノ

護持シ來タレルモノナリト和尚姓ハ淳于氏唐ノ揚州江陽縣ノ人齊ノ辨士髡ノ後ナリ我天平勝寶六年本朝ニ歸化ス 聖武上皇大ニ其戒德ニ歸依シ菩薩戒ヲ受タマフ尋テ戒ヲ受ルモノ四萬餘人南都ノ招提寺及當國ノ藥師寺ヲ開基ス當山ノ開祖勝道上人モ亦其門下ヨリ出タマヘリ天平寶字二年大和尚ノ號ヲ賜同七年五月六日寂ス壽七十七今ヲ距ル一千一百三十一年

一古銅三重舍利塔 壹基

唐銅高九輪迄壹尺七寸五分下層ノ屋根四寸三分四方傳云土中ヨリ掘出スル所凡ソ七百年前ノ和製ニ係ルモノナリト

一水晶舍利塔 水晶寶形徑壹寸四分佛舍利拾九粒ヲ入ル更ニ高三寸二分ノ蓮臺アリ玉ノ上ニ火焰アリ共ニ鍍金 壹基

一三重寶塔 銅片製高九輪迄壹尺三寸五分 同

一赤土製古塔 弘法大師手製折田平内氏ヨリ當門主ヘ寄贈ノ品 同

一傳教大師御筆不動尊 立像設色畫幅地絹堅二尺二寸六分巾壹尺壹寸五分袂裝金襴若干 壹幅

大師諱ハ最澄姓ハ三津氏江州滋賀郡ノ人本朝天台ノ始祖ナリ

延曆七年比叡山ヲ開基シ弘仁十三年六月四日寂ス壽五十六 嵯峨帝ノ澄上人ヲ哭スルノ御製アリ世ニ傳ハル今ヲ距ル一千七十三年

一慈覺大師御所持古畫兩界曼荼羅 絹地堅凡五尺七寸巾四尺六寸袂裝金襴若干 二幅

大師諱ハ圓仁姓ハ壬生氏 崇神天皇第一皇子豐城入彦命ノ裔當國都賀郡ノ人ナリ歲十五ニシテ叡山ニ登リ傳教大師ニ依リ

薙髮シ終ニ本朝天台宗ノ第二祖ト爲ル 仁明天皇ノ嘉祥元年叡旨ヲ奉テ當山ニ來リ大ニ釐革スル所アリ三佛堂及法華常

行ノ二堂皆其創立ニ係ル滿山ノ衆徒勝道空海ノ兩派モ亦皆此時天台ニ歸ス後チ叡山ニ歸リ貞觀六年正月十四日寂ス壽七十

一今ヲ距ル一千三十一年

一智證大師御筆不動尊 絹地堅二尺四寸巾一尺二寸 壹幅

一同 不動尊 絹地堅凡三尺八寸巾凡二尺二寸五分 同

大師諱ハ圓珍讚州那珂郡ノ人ナリ比叡山座主義眞和尚ニ隨テ
薙髮ス本朝天台ノ第三祖ニシテ亦三井寺ノ開祖タリ寛平二年
四月廿九日寂ス壽七十八今ヲ距ル一千五年

一當麻中將姫刺繡不動尊

堅貳尺八寸横壹尺壹寸五分佛體立像二
脇士附袂裝若干蓮花唐草共ニ繡畫ナリ

壹幅

中將姫ハ右大臣從一位藤原豐成卿ノ女入道シテ大和國當麻寺
ニ住ス藕糸ノ曼陀羅ヲ以名アリ寶龜六年三月十四日卒ス壽廿
九今ヲ距ル一千百廿年

一天眞親王御筆五大明王八大童子遊戲御畫像

壹幅

一大幅涅槃像

絹地總丈壹丈二尺
巾七尺五寸最密畫

同

一古畫淨土曼荼羅

絹地堅三尺五寸巾二尺七
寸或云唐代ノ畫ナリト

同

一淨土大曼荼羅

絹丈壹丈五尺
餘横九尺餘

同

一慧心僧都筆阿彌陀如來尊像

絹堅三尺八寸巾一尺
一寸金襴袂裝若干

同

僧都諱ハ源信姓ハト氏和州葛木郡ノ人薙髮シテ慈惠大師ニ事
フ比叡山横川ノ慧心院ニ住セシテ以慧心僧都ト云天資聰明ニ
シテ顯密ノ學究メスト云「ナシ後ニ圓光大師淨土ヲ倡ルヤ其
幽旨僧都ニ發スト云寛仁元年六月十日或ハ云寂ス壽七十六今
ヲ距ル八百七十八年

一天眞親王御筆彌陀三聖尊像

壹幅

一弘法大師御筆阿彌陀尊名號

絹地堅壹尺三寸巾
六寸五分絹袂裝

同

一弘法大師御筆阿彌陀如來名號

紺紙金泥堅尺八寸
巾九寸袂裝金襴若干

同

傳ヘ云此御名號ハ織田信長卿ノ秘藏ナリシガ後チ轉傳シテ慈
眼大師ノ御所有ニ歸セシモノナリト

壹幅

一圓光大師御筆阿彌陀如來名號

紺紙金泥堅凡壹尺六寸巾六寸一分絹袂
裝若干名號ノ左右ニ左ノ如ク記セリ

壹幅

たゞ憑め萬の罪はふかくともわが本願のあらん限は

授蓮生法師

源空 花押

大師諱ハ源空法然上人ト號ス姓ハ漆氏作州稻岡ノ人淨土宗ノ開祖タリ建曆二年正月廿二日寂ス壽八十今ヲ距ル六百八十四年蓮生法師ハ即チ熊谷直實ナリ

一 後水尾帝御宸翰阿彌陀如來名號 幅二尺一寸 巾五寸二分

一 東照宮御眞蹟阿彌陀佛名號 一幅ハ幅 二幅

東照公ハ軍陣多事ノ日ト雖念佛三万反ノ日課ヲ怠タリ玉ハス殊ニ此名號ハ怨親平等ノ大悲心ヲ以彼我戰死群靈ノ爲メ之レヲ親眷シテ大樹寺本尊ノ御腹籠ニナシ玉ヘシ數十葉ノ内ナリト云フ

一 守澄親王御筆大猷院殿尊號 緞地堅三尺八分巾七寸八分袷裝 赤地雲形大和錦若干勝伯爵寄附 壹 幅

一 千手觀音古畫尊像 堅二尺七寸巾一尺二寸 五分赤地金襴袷裝若干 同

筆者年代共未詳初メ武田信玄ノ護持佛ナルヲ故アリテ東照公

ニ傳ハリ公之ヲ慈眼大師ニ付囑ス後チ大師家光公及ヒ竹千代

君ノ爲ニ祈ルコアリテ之ヲ當山新宮ニ納ムト云大師親筆ノ裏

書ニ詳ナリ

一 天真親王御筆千手觀音尊像 緞地堅三尺壹寸五分 橫壹尺四寸最密畫 壹 幅

一 同 御筆白衣觀音尊像 緞地堅三尺壹寸五分 橫壹尺壹寸五分 同

一 古畫軍荼利明王 緞地堅四尺貳寸 橫壹尺壹寸五分 同

一 同 大威德明王 緞地堅三尺貳寸五分 橫壹尺壹寸五分 同

一 愛染明王御畫像 緞地堅三尺壹寸五分 橫壹尺壹寸五分 同

一 兆殿司筆十六羅漢像 慈眼大師御秘藏畫 緞地堅三尺八分巾 拾六枚

殿司名ハ吉山又破草鞋又赤脚子ト號ス洛東東福寺ノ殿司ニシ

テ同寺枝坊ノ住持タリ應永三十四年八月廿日寂ス壽七十六今

ヲ距ル四百六十八年

一 十王畫像 緞地堅三尺貳寸五分 橫壹尺三寸 六分袷裝若干慈眼大師御秘藏畫 拾 幅

一 公辨親王御寄附天台大師御畫像 緞地堅三尺壹寸 橫壹尺貳寸 四分袷池裏菊御紋赤地金襴 壹 幅

一 弘法大師御自畫御肖像 紙地丈貳尺壹寸 橫壹尺 四寸五分 袷裝若干 同

此幅ハ當山舊寂光寺ノ寶物ナリ同寺ハ弘仁十一年八月弘法大師ノ開基ニ係ル爾來一千餘年ヲ繼續セシガ明治元年神佛分離ニ依リ廢寺ニ屬シ寂光ヲ若子ト改メ尋テ火災ニ罹レリ然ルニ此寶軸ハ幸ニ罹災已前當寺ニ移セシナ以テ今ニ傳ルコト得タリ

一 降魔大師畫像 孤郵筆上ニ大師眞筆ノ紺紙金泥經切ヲ附シ勝伯ノ贊アリ同伯爵寄附

一 慈惠大師小畫像 徳川家達公ヨリ當門主僧正へ贈與セラレシ軸ナリ

同 壹 幅

古經之部

一 聖德太子御筆法華經方便品 壹 軸

太子ハ三十一代 用明帝第一ノ皇子ナリ三十代 敏達帝ノ二年正月朔日御誕生三十三代 推古帝ノ元年立テ皇太子ト爲リ萬機ヲ攝録ス史ニ云フ 推古帝二十九年皇太子薨ス壽四十九歳シテ聖德太子ト曰フ太子生レテ聖智長スルニ及テ一ニ十人

ノ訴ヲ聞キ以テ聽斷ヲ失フヲナシ是ニ至テ長幼慈母ヲ亡フガ如ク哭泣ノ聲行路ニ滿ツト太子ニ六ノ名アリ既戸ト曰ヒ上宮ト曰ヒ聖德ト曰ヒ耳聰ト曰ヒ八耳ト曰ヒ豐聰ト曰フ今ヲ距ル一千二百七十四年

一 光明皇后御筆法華經 鳥ノ子白紙黒書黒塗箱入 八 軸

皇后ハ淡海公 右大臣藤原不比等ノ二女四十五代 聖武帝ノ后ナリ元亨釋書ニ云體貌姝麗ニシテ光輝アリ故ニ光明后ト曰ト四十七代淳仁天皇天平寶字二年尊テ中臺天平應仁正皇太后ト曰フ同四年六月七日崩ス壽六十今ヲ距ル一千一百三十五年

一 傳教大師御筆法華經第五之卷 襖裝赤地金欄 壹 軸

一 弘法大師御筆草書般若心經 鳥ノ子白紙黒書黒塗箱入 壹 卷

一 同御筆般若心經 鳥ノ子白紙墨書全文廿行襖裝赤地金欄軸心水晶 同

大師入唐ノ際心經一千六百卷ヲ書寫シテ行路ノ無難ヲ祈リ玉

フ本經ハ即チ其一ナリト云

一前同斷般若心經壹卷ハ四本龍寺什寶 壹卷ハ千葉立造氏寄贈

貳卷 壹册

一文德天皇御宸翰法華玄義第六

紙數六十九葉被裝赤地金襴卷末ニ慈眼大師親カヲ當山本宮社ニ寄附スル由ヲ記セラレタリ

文德天皇御諱ハ道康 仁明帝第一ノ皇子嘉祥三年四月第五十

五代ノ寶位ニ即キ天安二年八月崩ジ玉ヲ聖壽三十二今ヲ距ル

一千三十七年

一慈覺大師御筆法華經普門品紺紙金泥細字 貳百十三行

壹軸

一同中禪寺へ御寄附法華經紺紙金泥細字 長三寸貳分

八軸

一菅公御筆大乘頂王經紺紙金泥ヲ以テ一行ツ、隔次ニ之レヲ書ヌ四百廿九行

壹軸

菅公諱ハ道眞延喜三年三月廿五日薨ス後チ 勅シテ天滿大自

在天神ト號ス今ヲ距ル凡一千年

一慈惠大師御筆佛頂尊勝陀羅尼烏ノ子白紙墨書 被裝赤地金襴

壹軸

一同法華經文七行紺紙金泥

壹葉

大師諱ハ良源江州淺井郡ノ人本朝天台ノ第四祖ナリ永觀三年

即チ寛和元年正月三日寂ス壽七十四世ニ元三大師ト云今ヲ距ル九百

十年

一西行法師揮毫法華經紺紙金泥 桐箱入

八軸

法師諱ハ圓位俗名ハ佐藤憲清ニ作ル藤原秀郷ノ裔佐藤康清

ノ子ナリ兵書ニ通ジ和歌ヲ善シ 鳥羽上皇ノ宮ノ北面ノ士ト

爲リ左衛門尉ニ任シ寵アリ然レモ遁世ノ志堅ク遂ニ官ヲ辭シ

髮ヲ削リ西行ト號ス時歲二十三建久元年即チ文治六年二月十五日ハ

六十寂ス壽七十三今ヲ距ル七百五年

一伏見天皇御宸翰阿彌陀經

壹軸

雲霞ニ草花ノ地模樣アル紙ニ金泥ニテ百二十行ニ之ヲ書シ玉ハ又經文ノ間ニ御和歌アリ模糊トシテ讀ミ難シ被裝黑地金襴

伏見天皇御諱ハ熙仁 後深草帝第二ノ皇子正應元年三月第九

十二代ノ寶位ニ即ク永仁六年七月位ヲ皇太子ニ禪リ正和二年十月薙髮シテ法名ヲ素融ト稱シ文保元年九月三日崩ジ玉フ聖壽五十三今ヲ距ル五百七十七年

一後伏見天皇御宸翰法華經化城喻品

壹軸

金泥野紙墨書都ヲ三百卅行天地ニ摸樣アリ袿裝背地金襴

後伏見天皇御諱ハ胤仁 伏見帝第一ノ皇子永仁六年七月第九

十三代ノ寶位ニ即ク正安元年正月位ヲ皇太子ニ禪リ元弘三年

六月薙髮シテ法名ヲ理覺ト稱シ後ヲ行覺ト改ム建武二年四月

六日崩シ玉フ聖壽四十九今ヲ距ル五百六十年

壹軸

一元人鄭禿滿揮毫華嚴經卷第二十二

紺紙金泥

卷首ニ左ノ文及兜章天宮ノ密畫アリ本文都ヲ五百八行

榮祿大夫徵政使領掌謁鄉領延慶司事 臣鄭禿滿遠兒竊念荷

父母訓育之德

皇帝

皇太后 舍人大手眷遇之恩獲事

兩宮位階一品永懷罔極徒感寸誠於是金字書寫佛華嚴經一部

凡八十一卷首楞嚴經一部十卷爰伏佛乘祈

天永命伏願

乾坤比於覆燾日月並於照臨家國咸寧人神均慶

元統二年五月日謹誌

鄭禿滿ハ元ノ順宗皇帝ノ時ノ人其書雄麗絕倫元統二年ハ我

後醍醐帝ノ建武元年ニ當ル今ヲ距ル五百六十一年

一後醍醐天皇御宸翰法華經不輕品

壹軸

每字銀泥ニテ書キタル寶塔形ノ中ニ金泥ニテ書シ玉ヘリ都ヲ百卅八行袿裝背地金襴

後醍醐天皇御諱ハ尊治 後宇多帝第二ノ皇子文保二年二月第

九十六代ノ寶位ニ即ク史ニ云フ帝天姿英毅博ク書史ニ通シ篤

ク釋氏ヲ信ズ終ニ臨ミ元兇ヲ斥未ダ殄ザルヲ以恨ト爲シ遺命
 スラク葬ヲ薄フシ務テ恢復ヲ圖レ朕ガ身南山ニ瘞スト雖神常
 ニ北闕ヲ望ム若シ命ヲ墜ス者アラハ子ハ繼體ニアラズ臣ハ盡
 忠ニ乖クト言訖リ左ニ法華經ヲ把リ右ニ劔ヲ按シ以テ崩ス云
 云ト崩シ玉フ時曆應二年八月十五日ナリ聖壽五十二今ヲ距ル
 五百五十六年

一後水尾天皇御宸翰般若心經 紺紙金泥積裝藍地金襴 壹軸

是ハ寬永十三年東照宮廿一回忌ノ法會ニ丁リ 帝特ニ此經ヲ
 御書寫アリテ贈賜シ玉ヒシナリ今ヲ距ル二百五十八年

一禁裡御贈經 三十貳軸

紺紙金泥裏ハ雲霞ニ蓮池ノ繪模様積裝ハ大和錦ニシテ雲ニ金莢章ノ
 卷色異ナリ凡ベテ五色外題金文字每卷綴出積背ハ每卷其經意ヲ願
 更ニ此御經ハ水晶ニシテ筆者目録壹卷アリテ王公三十二人ノ名ヲ記
 地高詩繪圖様天地ヲ象ト下方ハ山海ニ花鳥上方ハ混淡ノ雲蓋ノ表中央ニ日章

徑五寸ナルテ壹分ニテ起シ真ハ切金ニテ中央ニ輪寶章徑貳寸貳分ナルテ貼
 之ニ莢章徑壹寸壹分ナルテ起シ真ハ切金ニテ中央ニ輪寶章徑貳寸貳分ナルテ貼
 形地黒色斜子アリテ紫絹糸打紐總附凡四尺六寸ナルテ附ケタリ
 同外箱ハ黒柿總高壹尺八寸五分堅箱ノ角ハ面取ニテ梨子地ニ莢章ト唐草ノ高
 繪箱ノ上更ニ桐ノ外箱アリテ題及御數ヲ都テ三重箱入ナリ
 往時東照宮及大猷公ノ御年忌法會ニハ每度必ス禁裡ヨリ御寫經ヲ御贈賜アラ
 ヒテラル例ニテ之ヲ禁裡御贈經ト唱ヒキ維新ノ初メ神佛分離ニ因リ東照宮ノ
 御經ヲモ當寺ニ附屬セラレタレバ當寺現ニ數通ヲ藏セリ中ニ就テ東照宮ノ方ハ
 最モ美中ノ美ヲ盡セリ又同宮ノ御經ヲ分合ヒシヨリ軸數或ハ三十三目録共或ハ三十五全
 上一定セス今茲ニ記スル御經ハ後櫻町帝ノ御時明和二年四月十七日東照宮百
 五十回忌ノ御贈經ナリ
 今ヲ距ル一百三十年

一後西院天皇御宸翰般若心經 紺紙金泥十八行 壹軸

後西院天皇御諱ハ良仁 後水尾帝第六ノ皇子承應三年十一月
 第一百十代ノ寶位ニ即キ貞享二年二月廿二日崩シ玉フ聖壽四十
 九今ヲ距ル二百十年
 一天眞法親王御筆法華經普門品 壹軸

紺紙金銀泥題號及爾時無ノ三字金泥其餘三字ツ、隔次ニ金銀泥ナリ

親王ハ、後西院帝第五ノ皇子御母ハ新大納言局寛文四年七月廿八日御誕生益宮ト稱セラル延寶元年七月親王宣下諱ヲ幸知ト賜フ同年十月七日薙髮日光新宮ト稱セラル同六年五月二日二品ニ叙ス同八年五月四日輪王寺第二世ノ御門跡ト爲ル貞享二年六月院宣ヲ以諱ヲ天真ト改ム元祿三年二月廿九日一品ニ叙ス同年三月朔日薨ス壽二十七勅シテ解脱院宮ト號セラル遺命ニ依リ尊骸ヲ荼毘シテ御骨ヲ比叡日光東叡ノ三山ニ分葬シ各寶塔ヲ建ツ今ヲ距ル二百五年

一櫻町天皇御宸翰阿彌陀經 紺紙金泥一百十九行 與ニ左ノ御文アリ 壹 軸

今茲丁先帝七回御忌先帝嘗親書阿彌陀經之標識今朕新書本經以祈冥福云
寛保三年四月十一日

大日本國天子昭仁謹書

櫻町天皇御諱ハ昭仁御父ハ 中御門帝 即チ上ノ御文ニ先帝トアル是ナリ 享保二十年二月第百十四代ノ寶位ニ即ク史ニ云フ帝聰敏絕倫世人聖德太子ノ再誕ト稱ス大嘗新嘗及七社宇佐ノ奉幣ヲ復スト寛延三年四月崩シ玉ヲ璽壽三十一今ヲ距ル一百四十五年

一公辦法親王御筆般若心經 白紙墨書十八行 袂裝赤地金襴 壹 軸

一慈眼大師御所持多羅葉古梵經 堅壹尺九寸巾壹寸 八分春慶塗箱入 三 葉

一有栖川宮御將來多羅葉古梵經 堅壹尺三寸五分橫壹寸九分版袂共壹百廿三 葉中央ニ二孔アリ長キ糸ヲ貫キ之ヲ綴レリ 壹 冊

此貝多羅古梵經ハ明治廿三年 有栖川宮威仁親王殿下印度ヨリ御將來ノ由ヲ以當輪王寺門跡彦坂誥厚へ賜ハリシモノナリ
一唐版法華經 壹 部
一明版一切經之内 壹 卷

- 一 高麗版藏經 欽本ナリ別ニ目錄アリ慈眼大師御所藏 數拾卷
- 一 活字一切經 寛永年中慈眼大師御志願ニ依リ大猷公ノ命ヲ以刊行セラレシモノ 全部
- 一 黄檗版一切經 同
- 一 傳教大師御眞蹟法華經版木 應永年中座禪院昌源僧正ノ寄附 同

佛器法衣之部

- 一 勝道上人御所持錫杖 總鐵製六環丈凡五尺赤地金襴袋入 壹 振
- 一 上人ノ當山ヲ草創スルヤ每ニ之ヲ曳テ山谷ヲ跋渉セシト云即チ當山開基ノ紀念千古ノ遺寶ナリ
- 一 同木杖 金襴地袋ニ入 壹 本
- 一 同小刀 上人佛像彫刻ニ用ヒラレシモノト云フ鑿嵌草ヲ以テ作りシ鞘アリ二本トモノノ鞘ニ納ム 貳 挺
- 一 同斧 上人立木觀音彫刻ノ節用ヒラレシモノト云フ其製古雅 壹 挺
- 一 同木杖 上人山中脩行ノ節用ヒラレシモノ金襴地袋ニ入 壹 挺

一 弘法大師旅行用佛具 皆 具

總唐銅製 此内飯食器壹個不足

大師瀧尾山開基ノ後同處ヲ勝道上人ノ上足道珍僧都ニ附屬シ理趣秘密供ノ法ヲ授テ國家安全ノ祈禱ト定メラレ其修法ノ用トシテ亦此佛器ヲモ與ヒラレタルナリ爾來每歲六月一七日間瀧尾神社ノ内陣ニ於テ當上人特ニ此佛器ヲ用ヒ大師ノ遺法ニ據リ彼ノ理趣供ヲ修シテ國家安全ヲ祈リツ、代々相傳シテ神佛分離ノ時ニ至マテ斷絶セザルコト一千餘年今唯々此佛器ヲ存スルノミ

- 一 慈覺大師御所持割五鈷 眞鍮長凡五寸堅ニ割リ組タルモノ中ニ佛舍利二粒ヲ嵌セリ 壹 握
 - 一 同 御將來八葉鏡 一ハ徑壹寸三分赤銅製ノ香合ノ如キモノニ入一ハ四寸 貳 面
- 承和五年慈覺大師入唐ノ際大唐ノ立法寺法全和尚ヨリ傳フル所嘉祥元年大師當山ニ齋ラシ中禪寺ニ納メラレシモノナリ傳

來ヨリ今ニ至ル凡一千五十年

一古鏡 壹ハ徑四寸八分八葉ニシテ面ニ坐像ノ三尊佛及十五ノ佛體ヲ刻セリ

一古錫杖 昌宣寄附ノ銘アリ

一古錫杖 唐銅貳股六環堅貳寸七分ニシテ墨塗四寸八分ノ柄アリ

一鐵製古錫杖 柄ナシニ股六環貳寸五分ニシテ横三寸七分内一個破損

一古馨 長五寸巾貳寸貳分建保五年六月男躰權現ヘ寄附ノ銘アリ

一古銅佛供碗 徑五寸高壹寸五分

碗ニ鑄シテ云奉施入于日光山中禪寺妙見大菩薩御寶前御器壹

具十枚年延元丙午六月晦日世 當今皇帝還城再位預用以後醜

嗣院白號焉當上人大現大工彦三郎入道施主比丘道賢爲傳於不

朽自筆耳

一慈眼大師御所持請雨鈴 口徑貳寸六分高六寸四分大師此鈴ヲ用テ雨ヲ祈リ驗アリシト云故ニ名アリ

一水晶數珠 珠凡三分母珠壹寸二ツ引紋鉄鍊打チ兩總サ附

一同 裝束數珠 大サ前同

一同 鉄鉢 口徑六寸五分高五寸

一同 鑽子 五ツ組匙筋出生板ニ拂共都テ朱塗

一同 戒尺 鐵刀樹長七寸巾壹寸三分

一同 拂子 總躰櫻衣製柄共ニ凡ノ貳尺五寸

一同 刺繡打鋪 地白給子風草ノ繡文アリ東照公ノ恩賜ナリ

一同 赤銅柄香爐 柄長八寸五分爐高貳寸五分

一同 唐銅獅子丸香爐 高貳寸

一同 御法衣箱

此箱内ニ納メアル御法衣左ノ如シ

木蘭紋絹三衣 鈍子袋入

裏菊御紋緋紋白大五條

赤地金龍織文金襴七條横被共

同 壹 個

壹 組

壹 雙

壹 握

壹 枚

壹 個

同 壹 個

同 壹 個

三 箱

三 領

壹 領

同 壹 領

袈裟ノ裏ニ記シテ曰此金龍袈裟者大僧正天海大佛供
養爲用意慶長十九年征夷大將軍家康公御手柄下給畢

輪袈裟破損アリ

赤色縹子半素絹

紫精好紗夏袍裳

赤色絹糸修多羅

同 紹直綴

白地紋絹褌衫裙

白羽二重長帽子

紋絹縁麻坐具

一 慈眼大師御重寶燕尾巾茶地純子裏絹
丈貳尺五寸

一同御法衣木闌色菱形
紋紗四ツ紐

一同同根竹杖長三尺
九寸

此三點ハ 後陽成上皇ヨリ寵賜ノ御物ナリ

壹 壹 壹 壹 同 同 壹 壹 同 壹 貳
本 領 個 枚 領 連 領

一 鍍金鍍銀修法佛具

內譯

金剛盤高壹寸七分長九寸壹分巾六寸貳分
中央ニ蓮座アリ又獅子形ノ三足アリ

鈴口徑貳寸三分
總高六寸三分

五鈷杵丈五寸
五分

三鈷杵前同

獨鈷杵前同

火舎香爐高七分五厘徑四寸三分
中輪高七分徑四寸五分

六器臺共 高壹寸五分徑貳寸七分

酒水器蓋臺共 高壹寸八分徑貳寸八分
壹分壹寸壹分徑貳寸壹分

塗香器蓋臺共 高壹寸九分徑三寸壹分
壹分壹寸壹分徑三寸壹分

飯食器高貳寸八分
徑三寸三分

花瓶口徑貳寸五分高六寸四分
分底徑三寸三分

皆 壹 壹 壹 同 同 壹 壹 同 壹 貳
具 面 個 握 具 組 具 個

- 一 鍍金鏤鏤關伽桶 口徑四寸四分高四寸 壹個
- 一 鍍金水抄 長八寸三分 壹本
- 一 關伽盤 梨子地唐草ノ金詩繪鍍金鏤鏤付 高八寸五分長壹尺七寸巾壹尺 壹個
- 一 三衣箱 鍍金裏菊御紋付二重高六寸六分長壹尺貳寸貳分巾九寸 壹組
- 一 草座 長壹尺三寸八分巾壹尺赤地金襴ノ額縁ニテ内ハ白地ニ裏菊ノ御紋ニツテ巾壹尺二寸ニ折リ疊ムベク作レリ左右ニ太キ絹糸長壹尺八寸ツ、ナルモノヲ巾壹尺ニ間隙ナク垂レタリ 壹枚
- 如意 鍍金壹尺九寸 壹握
- 柄香爐 鍍金九寸五分 壹個
- 菊御紋附香爐 唐銅高六寸口徑六寸蓋獅子高四寸貳分 三個
- 古銅屋形香爐 唐銅高壹尺梁間六寸貳分桁行四寸五分香爐ハ抽斗トシテ之ヲ仕込メテ元祿三年三月一日從四位下梶左兵衛佐定其親王ノ御廟前ヘ獻ヒシモノ 壹個
- 輪門法親王御法衣類

内譯

- 白地洞織桐鳳凰織文御七條袷 文化十二年三月御新調 壹條
- 同 琥珀織四季花尾長鳥織文御七條 天保十年正月御新調 同
- 同 萌黃地襪襪織麒麟鳳凰織文御七條袷 同
- 紫精好御鈍色 天保十二年御新調 壹具
- 紫精好紗御鈍色 弘化三年七月御新調 同
- 山吹色小葵夏御袍裳 嘉永三年六月御新調 同
- 紫小葵御袍裳 嘉永四年十月御新調 同
- 紫裏菊模樣御袍裳 同
- 赤地武田菱地紋綾織御單衣 同
- 紫小葵御裘代 安政三年十月御新調 同
- 紫御修多羅 慶應元年四月御新調 壹條

一同 古銅獅子丸大香爐 高壹尺七寸徑壹尺三寸慶安四年十一月廿日從四位上周防守羽林重宗奉納

同 力士捧持香爐 壹基 力士香爐ヲ捧グルノ像ナリ香爐鍍金蓋共總高壹尺徑八寸力士岩上ニ坐ス唐銅製高壹尺四寸朱檀唐草彫刻八角ノ蓋アリ高五寸縱壹尺五寸横壹尺 承應二年加賀中納言利常奉納三ツ具足ノ一

同 力士捧持燈籠 壹一對 燈籠鍍金八角徑七寸五分高壹尺六寸力士木製立像一ハ赤一ハ青極彩色別ニ臺座アリ高壹尺承應二年加賀瓜甲斐守奉納三ツ具足ノ内ナリ

同 布施壺 貳個 凡茶壺ニ似タリ一ハ木製鍍金箔塗丈九寸胴ノ徑八寸徑五寸六分一ハ銅製鍍金丈九寸蓋雨龍波形周圍靈芝唐草

同 堆朱香台 壹個 高蓋共壹寸五分徑四寸蓋雨龍波形周圍靈芝唐草高彫寛文三年四月朔日阿部豐後守忠秋奉納

同 紫銅鳥形釣香爐 同 分高四寸五

同 唐銅獅子丸香爐 同 承應二年四月廿日朽木民部少輔種綱奉納三足ニシテ蓋ニ獅子アリ總高四寸徑三寸

同 唐銅船形香爐 同 三足ニシテ高四寸七分三寸ニシテ横壹寸七分

同 青磁香爐 同 太鼓形口徑貳寸五分高貳寸三分寛文三年四月朔日阿部豐後守忠秋奉納

同 青磁香爐 同 御子蓋附總高六寸徑六寸五分寛文十二年十月廿日牧野佐渡守親成奉納

一同 大鈎燈籠 壹個 唐銅三味線胴ニシテ方壹尺三寸格子ニ唐銅ノ透彫中央ニ獅子ノ彫刻アリ承應二年四月二十日從五位下北條安房守奉納

緣起及詩歌古文書等之部

一勅撰日光山御縁起 內箱二重桐白木 外箱桐春慶塗 五卷 用紙鳥ノ子裏ハ金襴袷裝藍地金襴袷背ハ金泥ニテ霞ニ水草ノ繪模様軸心及ヒ袷裝ノ鉸鍊トモ鍍金唐草ノ彫刻アリ全篇都テ

二十七章日光開山ノ巔末ヲ記ス特ニ首章ハ 靈元上皇ノ宸翰 其餘二十六章ハ親王諸王月卿雲客ノ揮毫ニシテ每章狩野洞春

ガ畫ケル金碧ノ畫ヲ挿入セリ

靈元天皇御諱ハ識仁 後水尾帝第十六ノ皇子寛文三年四月第

百十一代ノ寶位ニ即ク貞享四年三月位ヲ皇太子ニ讓リ正德三

年八月薙髮シテ法名ヲ素淨ト稱シ享保十七年八月崩シ玉フ聖

壽七十九今ヲ距ル一百六十三年

一 東照宮御縁起

五 卷

東照公降誕ノ始ヨリ日光山鎮座ニ至ルノ事實ヲ記ス詞書都テ
 二十五章原書ハ第一及第十八即チ第四章ノ二章ハ宸翰其餘二十
 三章ハ王公ノ筆ニ成リ每章狩野探幽ガ畫ケル金碧ノ畫ヲ挿入
 ス其軸現ニ東照宮ノ神庫ニ祕藏セリ茲ニ記スル當寺所藏ノ軸
 ハ文化十一年幕府ノ製造ニ成リテ今ヲ距ル八十年ナリ其意匠
 裝飾ヲ言ハ、料紙ハ鳥ノ子ニシテ表ハ詞書金泥霞ノ中兼葭ニ
 水鳥ノ繪模様裏ハ金霞ノ中霞ニ松葉ノ散シ形付袷裝ハ紺地金
 襪ニシテ葵唐草ノ彫刻アル銀鉸鍊ヲ以之ヲ飾リ紫ノ長キ扁絲
 ナ附ス袷背ハ總金泥ニテ雲ニ霞ノ地模様ニ一株ノ喬松ト數十
 ノ千鳥トヲ隱起シ軸心ハ水晶ニシテ螺線仕込ナリ筆者ハ詞書
 二十五章都テ成島邦之丞司直畫ハ住吉廣定板谷廣長同廣隆同

廣壽ノ四人ニシテ最モ細密ナル金碧ノ畫ナリ其貴重ナル高稚
 ナル固ヨリ原書ニ如カザレモ精巧ナル美麗ナルニ至テハ肯テ
 譲ラズ

一 東照宮御祭禮圖卷

壹 軸

一 日光山八景畫并和歌

同

一 同 八景詩歌

同

一 同 八景詩集

壹 冊

一 同 列祖傳

三 軸

一 同 挿畫縁起

五 軸

一 明正上皇其他數十首和歌帖

壹 冊

慈眼大師三十三回忌追吊ノ和歌帖ニシテ 上皇ノ御製ヲ始ト
 シ親王公卿都テ十五人ノ玉詠アリ孰レモ短冊ニテ折本ニ貼セ
 シナリ

明正天皇御諱ハ興子 後水尾帝ノ皇女御母ハ東福門院源氏前
大將軍秀忠公ノ女寛永六年八月第百八代ノ寶位ニ即キ元祿九
年十一月崩シ玉フ聖壽七十四今ヲ距ル一百九十八年

一後櫻町院上皇御製其他數十首和歌帖

壹册

慈眼大師百五十回忌追吊ノ和歌帖ニシテ 上皇ノ御製ヲ始メ

王公三十人ノ玉詠アリ

後櫻町天皇御諱ハ智子 櫻町帝第一ノ皇女寶曆十三年十一月

第百十六代ノ寶位ニ即キ文化十年十一月崩シ玉フ聖壽七十四

今ヲ距ル八十一年

壹册

一有栖川宮熾仁親王御詠其他數十首和歌帖

家宮黒塗金泥ニテ北白川宮御紋
ヲ散附ス内梨子地塗桐外箱アリ

明治廿五年十月二日慈眼大師二百五十回忌御追吊ノ和歌ナリ
殿下ヲ始メ貴顯三十名ノ玉詠末ニ御發起北白川宮殿下ノ御跋

文アリ

遠忌ノ當日當山大師ノ廟前ニ於テ特ニ右ノ和歌披講式ヲ舉行
セラル其職員左ノ如

題者 御歌所
長官

從三位勳三等男爵 高崎正風

讀師

正三位伯爵 園基祥

講頌

從三位伯爵 大原重朝

同

正四位子爵 前田利豊

講師

正四位子爵 堤功長

講頌

正四位子爵 竹屋光昭

同

從四位男爵 西五辻文仲

一弘法大師撰文勝道上人開山之碑銅板 壹尺四寸三分
壹尺七寸七分 壹枚

大師親筆ノ原稿ハ西京高雄山ノ寶庫ニ現存セリ今此銅碑ハ輪
門第三世ノ宮一品公辨法親王ノ御染筆ニシテ之ヲ巨石ニ嵌シ

中宮祠境内ニ荒山登拜口ニ再建セシモノナリ亦神佛分離ニ因テ撤去セラレ今ハ礎石ノミ殘レリ彼ノ巨石ノ裏面ニハ左ノ文アリシナリ再建ノ緣由明カナレハ左ニ之ヲ録ス

重建勝道上人補陀洛山碑記

人藉靈境以進道境因勝人而彰名如補陀洛山亦徵哉勝道上人創窮其頂精練功成弘法大師揮天縱才文之詳矣於是世人昭々知其爲名山也其文則載性靈集傳到于今而其碑則歷年遼邈掃也不存嗚呼廢而不興非人情也近者余鼎樹貞珉刊其文焉庶乎使臨者讀雄文以審靈境知靈境誠爲進道之緣矣然則此舉豈曰無所係乎世有高談淨心蔑視山水者不亦謬哉因題碑陰聊紀歲月云

寶永二年歲次乙酉春三月

前天台座主一品公辨親王識

一弘法大師御作女體中宮額

壹面

竪凡三尺橫壹尺五寸杉ヲ以テ造リ篆書ニテ女體中宮ト書ス大師弘仁十一年九月當山瀧尾ヲ開基シ一社ヲ創立シテ女牀ノ神ヲ奉崇シ手ヲ此額ヲ作リテ社頭ニ掲ゲラル後世別ニ之ヲ模造シ更ニ金字トナシタル美麗ノ額ヲ以之ニ替ヘ此原品ハ別所別トハ別當所ノ一室ニ祕藏セシモノナリ

一同 大小二字圓額

壹枚

徑凡九寸厚八分ノ杉丸板ニシテ兩面ニ大小ノ二字ヲ一字ツ、鑄シ之ヲ柱上ニ懸テ其月ノ大小ヲ速知スルニ便リセシモノナリ周圍ニ承和元曆九月空海作當上人藤本坊亮慶寄附ノ十九字ヲ刻セリ其中承和元曆九月空海作ノ九字ハ大師ノ自署ニシテ他ノ十字ハ後世寄附者ノ刻スル所ナリ當時未タ藤承和元ハ大師入寂ノ前年ナリ當上人トハ當山ノ衆徒持坊云輪次ニ二荒

三社ノ別當ヲ勤ムルモノ、通號ニシテ一社ノ番ニ當ルキハ則チ其社ノ當上人ナリ

大師諱ハ空海姓ハ佐伯氏讚州多度郡ノ人眞言宗ノ開祖ナリ弘仁十一年七月廿六日當山ニ來リ後チ承和二年三月廿一日寂ス壽六十二今ヲ距ル一千六十年因ニ言大師日光山ニ來ルノ說國史ニ見ヘズト云テ以テ疑ヲ抱クモノアリ請フ之レガ惑ヲ解カシ天長二年乙巳四月三日勝道上人ノ徒弟道珍僧都日光山瀧尾建立草創日記ヲ書シテ曰夫瀧尾者加美天皇御願東寺々務空海僧都建立也頃日下毛野國公有請沙門勝道歷山碑銘依之和尚弘指ス大師欲見ニ荒勝形偷出花京發向東國以弟子眞濟并大安寺法師翰海等爲供奉先逗留伊豆國桂谷尋弘仁十一年庚子七月廿六日下著當山畢略僧都弘指ス語珍等我好翫此勝形雖有久住之思皇家修法無其暇仍欲歸京洛住持僧各一心續道跡話法命

至未來際勿令墜爾同十二月四日上洛和尚奏 皇朝以瀧尾爲御願云々ト之ニ由テ大師ノ登山明カナリ其國史ニ見ヘザルモノ蓋シ偷出ニ因ルナラン

一後水尾帝御製和歌二首

壹葉

此御製ハ東照公貳十壹回御忌法會ニ丁リ御贈經般若心經ノ包紙ニ宸翰アラセラレシモノニシテ其紙質ハ堅壹尺三寸六分横九寸貳分金泥霞ノ模様アル鳥ノ子紙ナリ 御製左ノ如

ほととぎすなくはむかしのとはかりや
けふのみのををそらにとふら舞
あつさゆみやしまの波をおさめをきて
いまはたおなし世をまもるらん

一明正上皇御製折句和歌

壹葉

慶安元年東照宮三十三回忌ノ法會ニ丁リ特ニ 叙慮ヲ籠メ玉

ヒシ御製ニシテ登有勢字能美屋散無志有佐牟久者伊幾遠冬不
羅婦字多ノ廿四字ヲ六字ツ、方形ニ右轉ニ排置シ其中ニ也久
之婦津ノ五字ヲ五行ニ排置シ周圍縱橫及ヒ斜形十字ニ字ヲ配
リ句ヲ連テ和歌ヲ成ス其數周圍ニ四首縱橫各五首斜形十字
ニ二首都テ十六首巧妙實ニ言語ニ盡シガタシ其料紙ハ堅壹尺
貳寸三分橫壹尺七寸ノ鳥ノ子紙ニシテ表ハ白無地裏ハ金霞ナ
リ

一鳥丸大納言光廣卿和歌

壹卷

卿ハ和歌ニ通シ定家流光悅流ノ書ヲ善シ亦戲畫ヲ善ス正二位
ニ叙シ權大納言ニ任シ法雲院ト號セリ寛永十五年七月十三日
薨ス壽六十今ヲ距ル貳百五十七年

一朝鮮國王李滉書額字

壹軸

靈山法界崇孝淨院ノ八大字絹地堅壹尺貳寸五分橫凡八尺三寸

襪裝白地金襴

同箱朱塗ニ金銀泥ノ龍ノ畫アリ銀鉸鍊ヲ附ス

一同祭大猷公文

壹葉

堅壹尺六寸五分ノ厚紙ニ維歲在乙未四月乙卯朔廿日甲戌朝鮮
國王李滉謹遣臣通政大夫吏曹參議知製教趙珩等致祭于日本國
大猷院之靈云々ノ文アリ都テ十七行一百三十一字書體楷書前
額字ト同筆ナルニ似タリ

同箱朱塗梅竹ニ月ノ金泥畫アリ銀ノ鉸鍊ヲ附ス

已上二點ハ我明曆元年四月朝鮮使臣ノ齎ス所ナリ今ヲ距ル二
百四十年

一東照宮三十三回忌御追吊和歌帖

家宮アリ稀代
ノ美術品ナリ

壹冊

法花經二十八品ノ要文ヲ題トシテ詠シ玉ヘル和歌
序品ハ後水尾天皇御製其他親王公卿方ノ高吟ナリ

一公寬親王御筆深砂王額字

壹面

親王ハ 東山天皇第三ノ皇子御諱ハ有定正徳三年公辨親王ノ御奏請ニ依リ御法嗣ト成リ是レヨリ日光新宮ト稱セラレ御諱ヲ公寛ト改ム正徳五年輪門御受職元文三年三月十五日薨ス御年四十二 勅シテ崇保院宮ト謚ス今ヲ距ル百五十七年

一有栖川宮熾仁親王御詠和歌扁額金霞大色紙 壹面

此御詠ハ宮ノ御舍弟ニ渡セラレシ當山第六十五世ノ貫首輪門慈性法親王ヨリ怪蔓當山ノ名物ニテ土瓶敷ナドニ造リ市中ニ販賣セリ太キハ甚ダ稀ナリノ大材ニみやまには君にさゝぐるものぞなしあらつたなしのこのつたかつらト云御歌ヲ添テ進セラレシカハ宮ヨリ「蕩かつら二荒のやまにいらばせてかゝるふとしきめぐみうけゝむ」ト御返ヘシアラセラレシ御歌ナリ

一日光山縁起

貳卷

此縁起ハ補陀洛山建立修行記弘仁九年二月開山上人ノ徒弟道珍教長仁朝曾鎮ノ四人合議シテ記セシモノ

瀧尾建立草創日記天長二年四月三日道圓仁和尙入當山記 齊衡二年講師ノ記 珍僧都筆記 滿願寺三月會日記天安元年六月座主傳達ノ記 已上四部ノ舊記ヲ合セシモノナリ寶永年中 靈元上皇敕旨ヲ以此四部ヲ原トシテ假字文ノ縁起ヲ撰バシメタマフ即チ前ニ掲ケシ 勅撰ノ御縁起ト稱スルモノ是ナリ今此二卷ハ彼ノ假字文ノ御縁起ニ對シテ眞字縁起トモ稱セリ

一道珍僧都撰併書瀧尾山縁起天長二年四月ノ筆記ニ係ル千古ノ遺物ナリ 壹卷

一公辨親王御筆寂光釘念佛縁起 同

一光國卿祭棍左兵衛佐文 同

一吊天海大僧正書翰 參册

妙門竹門等ノ法親王及諸公卿尾紀水ノ御三家ヲ始大小ノ諸侯伯其他各宗ノ高德等ヨリ痛悼ノ吊詞ヲ寄セラレシ書翰大り別ニ其目錄アリ

一諸宗僧侶追吊慈眼大師得頌

四通

外ニ人馬御朱印壹通晃海僧正俳句壹葉中根壹岐守書狀壹通共
ニ壹箱ニ之ヲ藏ム

一澤庵和尚祭慈眼大師文壹凡四尺四寸巾
壹尺三寸象牙軸

壹幅

和尚ハ東海寺ノ開山ニシテ宗彭ト號ス正保二年十二月十一日
寂ス壽七十三今ヲ距ル二百五十年

一隱元禪師書翰壹八寸八分巾壹尺五寸五分
橫幅金襴袂裝軸心象牙

壹幅

此書ハ酒井空印ニ與ヘシモノナリ禪師諱ハ劉琦一作陸琦明ノ
閩州福清縣ノ人姓ハ林氏我承應三年ニ歸化ス本朝黃檗ノ開祖

タリ寛文十三年即延元四月三日寂ス壽八十二大光普照國師ト

謚ス今ヲ距ル二百二十二年寶永三年以來五十年毎ニ謚ヲ加フ

故ニ更ニ佛慈廣鑑經山首出覺姓圓即等ノ號アリ

壹卷

一鳥石翁祭王右軍文王右軍ノ木像ニ添ヘテ當山
慈眼堂ヘ納メシモノナリ

古書畫之部

一尊圓法親王御筆圓頓章紙壹三尺貳寸三分
橫壹尺袂裝若干

壹幅

親王ハ九十二代 伏見帝第六ノ皇子ニシテ京都粟田ノ御門跡
院宮ト爲ル書道ニ達シ入木道御家流ノ中興ナリ又戲畫ヲ善ス

延文元年九月二十三日薨ス壽五十九一品ニ贈叙シ大乘院ノ宮
ト號ス今ヲ距ル五百三十九年

一休禪師筆法語壹貳尺三寸
巾壹尺七分

壹幅

禪師諱ハ宗純又東海順東海ハ猶ホ日本ト云ガ如シ順トハ一書ニ云ク順純
音通ズルヲ以テ互ニ用ウト見ヘタリ惠慈相ヒ用ウ

寺ニ住持タリ本書ニ天澤七世トアリ其
寺未詳識者ノ指示ヲ俟ツ書及戲畫ヲ善ス文明十三年

十一月廿一日寂ス壽八十八今ヲ距ル四百十四年

一慈眼大師御筆法語壹壹尺六分橫壹
尺五寸袂裝若干

壹幅

一後水尾帝御宸翰

壹 幅
壹 具

一同七夕御製和歌三幅對

但シ此内貳幅ハ智仁貞清二親王ノ御歌ナリ三幅共豎凡壹尺四寸横凡貳尺ノ御懷紙ニシテ袿裝金襴若干

後水尾天皇御諱ハ政仁後後陽成帝第三ノ皇子慶長十六年四月第七代ノ寶位ニ即ク寛永五年八月位ヲ内親王ニ遜リ慶安四年五月薨髮シテ法名ヲ圓淨ト稱シ延寶八年八月十九日崩シ玉フ聖壽八十五今ヲ距ル二百十四年

智仁親王ハ挂宮ノ祖ニシテ寛永六年三月七日薨ス今ヲ距ル二百六十五年

貞清親王ハ伏見宮ノ第九世ニシテ承應二年七月四日薨ス今ヲ距ル二百四十二年

一守澄法親王御詠和歌

壹 葉

懷紙豎壹尺五分横壹尺五寸左ノ御歌ナリ

人しれずわがしめしの、撫子は花咲ぬへき時ぞ來にける

親王ハ後水尾帝第三ノ皇子御母ハ壬生院藤原氏贈左大臣園基任卿ノ女京極局稱ス寛永十一年七月十一日御誕生今宮ト稱セラ

ル正保元年十月二日親王宣下諱ヲ幸教ト賜フ同月十六日青蓮院御門跡尊純法親王ヲ戒師トシテ薙髮シ諱ヲ尊敬ト改ム承應三年十一月日光御門主ト爲ル時歲廿一同四年天台座主ニ兼補シ尋テ牛車ヲ賜フ同年十月廿六日宣旨ヲ以輪王寺宮ト稱セラレ輪王寺ノ號此ニ昉ル延寶元年五月上洛奏請シテ諱ヲ守澄ト改ム同八年五月十六日薨ス壽四十八 勅シテ本照院宮ト稱セラル今ヲ距ル二百十五年

一天眞親王御筆圓頓二大字 紙豎壹尺貳寸八分横三尺四分袿裝金襴 壹 幅

一公辨法親王御筆山水畫 紙豎壹尺六分横貳尺壹寸八分袿裝金襴純子若干 同

親王ハ 後西院帝ノ皇子ニシテ寛文九年八月廿一日御誕生貴宮ト稱ス延寶六年十月十九日親王宣下諱ヲ秀憲ト賜同月廿六日薙髮シテ諱ヲ公辨ト改ム天和二年八月十六日二品ニ叙シ元祿三年三月廿九日輪王寺第三世ノ御門跡ト爲ル寶永四年正月六日准后宣下正徳五年五月廿日御辭職 勅シテ大明院宮ト稱セラル享保元年四月十七日薨ス壽四十八今ヲ距ル百七十九年

一 公遵法親王御詠詩

壹 幅

紙堅九寸三分横壹尺九寸裱裝若干詩ノ題ハ中秋不見月至子夜初晴ニテ雨歇雲開云々七絶尊號環山

親王ハ中御門院帝第二ノ皇子御母ハ清水谷大納言實業卿ノ女民部卿典侍ト號ス享保七年正月三日御誕生二宮ト稱セラレ同年七月毘沙門堂ノ御繼嗣ト爲ル同十五年十二月廿二日親王宣下諱ヲ保良ト賜フ同十六年九月十八日薙髮諱ヲ公遵ト改ム同十九年五

月四日二品ニ叙ス同二十年五月八日改テ輪王寺第四世ノ宮公寛法親王ノ嗣ト定メ日光新宮ト稱セラレ元文三年三月九日同寺第五世ノ御門跡ト爲ル同五年三月十六日一品ニ叙ス寛延二年七月十三日准后宣下寶曆二年八月廿三日御辭職 勅シテ隨自意院ト號ス安永元年九月廿七日御再住第七世ノ御門跡ト爲ル同九年三月廿日御辭職 勅シテ隨宜樂院宮ト號ス天明八年三月廿五日薨ス壽六十七今ヲ距ル百七年

壹 幅

一 東照宮御書翰

堅五寸九分横壹尺五寸八分裱裝葵紋散金襴若干爲端午之祝儀云々羽柴右近太夫へ宛タル書ナリ

壹 幅

一 東照宮御詠和歌我が宿の御歌

色紙堅九寸三分横壹尺貳寸壹分裱裝若干

公諱ハ家康贈正一位太政大臣廣忠卿ノ子母ハ水野氏天文十一

年參州岡崎城ニ生ル 後陽成天皇慶長八年二月詔シテ公ヲ征夷大將軍ニ補シ右大臣ニ任シ淳和獎學兩院ノ別當ヲ兼テ源氏ノ長者ニ進メ隨身兵仗ヲ賜元和二年三月太政大臣ニ任シ同年四月十七日薨ス壽七十五今ヲ距ル二百七十九年同三年二月詔シテ號ヲ東照大權現ト賜三月正一位ヲ贈ラル正保二年十一月宮號宣下

一 台德公御筆天滿宮神號

壹 幅

豎四尺六寸六分横九寸四分五厘裱裝金襴若干

公諱ハ秀忠東照公ノ第三子母ハ西郷氏天正七年四月誕生慶長十年四月征夷大將軍ニ補シ德川二寛永三年八月太政大臣ニ任ス同九年正月廿四日薨ス壽五十四 詔シテ正一位ヲ贈リ台德院ト號ス今ヲ距ル二百六十二年

壹 幅

一 大猷公御筆當山役人云々朱書豎壹尺壹寸七分中壹尺五寸八分金襴裱裝若干

壹 幅

公諱ハ家光台德公ノ子慶長九年七月誕生元和九年七月征夷大將軍ニ補シ德川三慶安四年四月廿日薨ス壽四十八詔シテ正一位太政大臣ヲ贈リ大猷院ト號ス今ヲ距ル二百四十四年

壹 幅

一 巖有公御筆馬ノ畫 紙豎壹尺四寸七分横壹尺壹分金襴裱裝若干

公諱ハ家綱大猷公ノ子寛永十八年誕生慶安四年八月征夷大將軍ニ補シ德川四延寶八年五月八日薨ス壽四十同年六月 詔シテ正一位太政大臣ヲ贈リ巖有院ト號ス今ヲ距ル二百十五年 一 常憲公御筆觀用教戒 絹地豎壹尺三寸四分横貳尺五寸金襴裱裝若干

壹 幅

公諱ハ綱吉大猷公ノ第五子正保三年誕生延寶八年八月征夷大將軍ニ補シ德川五寶永六年正月十日薨ス壽六十四同年二月

詔シテ正一位太政大臣ヲ贈リ常憲院ト號ス今ヲ距ル一百八十六年

一文昭公御筆山人二字

壹幅

紙壹尺六分横壹尺六寸五分裱裝若干

公諱ハ家宣スレ甲斐國主德川綱重卿ノ長子初ノ名ハ綱豐寛文二年

誕生寶永六年五月征夷大將軍ニ補シ德川六代將軍正德二年十月十四

日薨ス壽五十一同年十一月 詔シテ正一位太政大臣ヲ贈リ文

昭院ト號ス今ヲ距ル一百八十三年

壹幅

一有德公御筆駒とめてノ圖

紙壹尺八寸六分横壹尺三寸四分法裝若干

公諱ハ吉宗紀伊光貞卿ノ第四子貞享元年誕生享保元年八月征

夷大將軍ニ補シ德川八代將軍寶曆元年六月廿日薨ス壽六十八同年七

月 詔シテ正一位太政大臣ヲ贈リ有德院ト號ス今ヲ距ル一百

四十四年

一惇信公御筆注連ニ鶯ノ圖

壹幅

紙壹尺三寸五分横壹尺貳寸七分裱裝若干

公諱ハ家重有德公ノ子正徳元年誕生延享二年十一月征夷大將

軍ニ補シ德川九代將軍寶曆十一年六月十二日薨ス壽五十一同年七月

詔シテ正一位太政大臣ヲ贈リ惇信院ト號ス今ヲ距ル一百三

十四年

一浚明公御筆羅漢ノ圖

壹幅

紙壹尺四寸三分横壹尺八寸四分裱裝若干

公諱ハ家治惇信公ノ子元文二年誕生寶曆十年九月征夷大將軍

ニ補シ德川十代將軍天明六年九月八日薨ス壽五十同年十一月 詔シ

テ正一位太政大臣ヲ贈リ浚明院ト號ス今ヲ距ル一百九年

一文恭公御筆壽善二大字

壹幅

絹堅四尺横壹尺六寸貳分紙裱裝若干

公諱ハ家齊有徳公ノ曾孫ニシテ一橋治濟卿ノ子ナリ安永二年
誕生天明七年四月征夷大將軍ニ補シ徳川十一文政十年二月太
政大臣ニ任シ天保十二年閏正月卅日薨ス壽六十九 詔シテ正
一位ヲ贈リ文恭院ト號ス今ヲ距ル五十四年
一昭徳公御筆尙立二大字

壹幅

紙堅四尺壹寸六分横壹尺九寸六分裱裝若干

公諱ハ家茂紀伊齊順卿ノ子文恭公ノ孫ナリ弘化三年誕生安政
五年十二月征夷大將軍ニ補シ徳川十四慶應二年八月廿一日薨
ス壽廿一 詔シテ正一位太政大臣ヲ贈リ昭徳院ト號ス今ヲ距
ル二十九年

壹卷

一大猷廟御寶物鶴林悲嘆之圖黒塗箱入

此卷軸ハ最モ細密ノ美術畫ナリ或ハ云明代ノ物ナリト

一大猷院殿貳拾壹回御忌法會之圖總丈五尺九寸巾三尺
貳寸五分極細色畫

三幅

一同貳拾五回御忌法會之圖前同斷何レモ彩色
ノ畫ニ裱具ナリ

同

一狩野探幽筆三幅對畫中稚兒文殊
左右各山水

壹具

一同 三幅對中觀音大士
左右瀑布

同

一同 梅ニ鶯ノ畫豎壹尺三寸五分横壹尺裱裝
若干 大猷廟御寶物ナリ

壹幅

此畫ハ將軍家光公ノ命ニ依リ圖スル所ナルヨシ別記ニ見ヘタ
リ探幽諱ハ守信狩野氏孝信ノ長子ナリ初メ采女ト稱シ入道シ
テ探幽齋ト號ス丹青ノ妙絶倫ナルヲ以法眼ヨリ法印ニ進ミ宮
内卿ト稱ス 後水尾上皇嘗テ之ヲ召シ尊影ヲ寫サシメ 宣シ
テ筆峰大居士ノ號ヲ賜フト云延寶二年十月七日卒ス壽七十三
今ヲ距ル二百二十年

一古川叟筆三幅對畫

壹具

中壽老神左右鯉魚絹地縱四尺三寸五分横貳尺貳寸

古川叟諱ハ常信狩野氏尙信ノ子通稱右近古川叟ハ其號ナリ寬
耕齋ト稱ス畫ヲ以中務卿ニ任シ法眼ニ叙ス正德三年二月廿七
日卒ス壽七十八今ヲ距ル一百八十二年

壹 對

一 嵩谷筆四覺畫雙幅 縱四尺三寸五分
橫三尺裱裝若干

嵩谷姓ハ高氏名ハ一雄屠龍齋ト號ス英一蝶ノ畫風ヲ慕ヒ能ク
其妙ヲ得タリ文化元一作ニル八年八月廿三日卒ス壽七十五今ヲ距
ル九十一年

壹 對

一 芭蕉翁自畫讚雙幅 千葉立造
氏寄附

堅壹尺八寸五分巾壹尺裱裝若干
翁ハ松尾氏名ハ桃青初ノ名ハ宗房幼字ハ金作後忠右衛門ト改
メ又甚七郎ト改ム號ヲ羽扇又釣月又羊角ト云伊賀ノ上野藤堂
侯ノ臣ニシテ俳諧ヲ善シ四方ニ周遊ス又畫ヲ善スト云ハ門人
許六ノ備筆ナリト云元祿七年十月十二日逝ス壽五十三今ヲ距

ル二百零一年

壹 幅

一 小川笠翁筆芭蕉翁肖像 千葉立造
氏寄附

絹地縱貳尺壹寸五分橫九寸五分裱裝若干
笠翁又破笠ト號ス通稱平助芭蕉翁ノ門人ニシテ俳諧ヲ善シ俳
名ヲ宗字ト云延享四年六月三日逝ス壽八十五今ヲ距ル一百四
十八年

壹 軸

一 北島雪山書 料紙鳥ノ子堅九寸五分
長若干千葉立造氏寄附

臨水亭記ト題シ數百言ノ文字ヲ楷艸隸篆行ノ五體ニ書セリ雪
山又雪參名ハ三立又花谿ト號シ蘭隱ト稱ス肥後熊本ノ人ナリ
文衡山ノ筆法ヲ得テ其妙ヲ極メ支那人ヲ驚カセシヲアリト云
都筑道乙細井廣澤等其門ニ出ツ元祿十年卒ス今ヲ距ル一百九
十八年

壹 幅

一 慈眼大師御書翰

一 慈眼大師御書翰

此御書翰二葉トモ曼殊院門跡ヨリノ寄贈ニ係ル

壹葉

一 八重のちり

壹冊

一 い伊のやま

同

此二冊ハ寛延年中淡路ノ入稻田某ノ輯録ニ係ル日光八景ノ俳句ナリ

一 慈眼堂御寶物古畫屏風 後陽成上皇ヨリ天海大僧正ヘ御下賜御物或ハ云浮世又平ノ畫ナリト

壹雙

一 大猷廟御寶物舞樂圖金屏風

貳雙

一 唐兒遊繪金屏風

壹雙

一 藤棚繪金屏風

同

一 十二箇月繪屏風

同

一 六ヶ仙圖ニ發句ノ屏風

同

一 山岡鉄舟居士書百壽屏風 千葉立造氏寄附

同

一 山水畫貳枚折腰屏風

同

是レハ瑜伽定院御門跡 嵯峨大覺寺御先住ニテ即慈性親王ノ御戒師ナリ 御遺物トシテ慈性親王ヘ御寄贈アリシモノナリ

古器物之部

一 慈眼堂御寶物三重香合 丸形梨子地松ニ新ノ金高時繪内朱塗物高貳寸八分徑貳寸

壹組

一 同 二重香合 角形銀切金塗内梨子地總高壹寸五分徑長素木金高時繪菊御紋唐草高貳寸六分徑貳寸壹分内ニ白銅ノ子母アリ

同

一 同 棗 分徑貳寸壹分内ニ白銅ノ子母アリ

壹個

一 同 棗 梨子地丸ノ内ニツ引紋付高貳寸五分徑貳寸四分缺損アリ

同

一 同 香筋 減金凡

壹雙

一 同 香筋 減金凡五

壹個

一 同 火筋 白銅凡七

壹雙

一 同 香盆 梨子地七草ノ金高時繪長壹尺八分巾七寸五分家光公寄贈

壹個

一 慈眼堂御寶物書棚 長貳尺高肆寸 壹個

一 料紙箱 梨子地梅長壹尺三寸 高肆寸 壹個

一 硯箱 硯書滴共皆具箱 梨子地益ノ表松ニ鶴裏住ノ江都 長八寸貳分 巾七寸四分 高貳寸七分

一 硯 青白色ノ石ニシテ周圍ニ竹ノ高彫アリ高ニ處 高壹尺九寸四分 厚凡七分

一 歛案 黒塗櫻ノ金高時繪 長九寸五分 巾五分 壹個

一 紫斑銅文鎮 長壹尺 巾五分 刻ス

一 蠟石小掩障

一 表ニ支那城池ノ彫アリ裏無地 堅九寸横壹尺壹寸 周圍ニ木 製赤塗ノ額縁アリ總體丈壹尺六寸五分 巾壹尺五寸五分

一 筆筒 退筆二枝入竹筒ナ

一 牧童書滴 青銅製 籬笠ノ人物臥牛ノ背上ニ 橫臥シタル形 長四寸高貳寸貳分

一 陶器桃形筆洗兼書滴

一 桃實貳個 固着一ハ單ニ水ヲ貯ヒ一ハ半身ニシテ筆洗ニ用

一 貳個ノ間小竅ヲ穿チ水ヲ通ズ全體大サ横四寸堅凡貳寸

一 藥奩 九形黒塗菊水金高時繪徑五寸高壹寸 六分中ニ黒塗沃掛藥壺七個ヲ藏メ

一 藥籠 黒塗印籠ナリ堅貳寸六分 巾

一 托手 唐桑製 高三寸四分 長壹尺八

一 古渡硝子皿 製徑八寸五分 洋

一 剃刀箱 削刀三挺 入梨子地菊ノ時繪長七寸四分 深九分 五厘六ツニ仕切アリ

一 鏡 白銅圓形 徑

一 扇 金地極彩色 畫骨黒

一 鞋 長凡壹尺 破損

一 湯溫器 青銅猫形 長壹尺 五寸高五寸七分

一 大猷廟御寶物岩付枝珊瑚 珊瑚三株 其二ハ各六寸 其一ハ 四枝根ニ岩アリ高三寸方六寸

一 同 蝟角

一 長三尺七寸 根ノ方小口ノ徑壹寸四分 五厘 量三百七十 勿花押二字アリ

一 同 阿蘭陀古製箱 高蓋共八寸長壹尺 巾六寸五分 角細工ニシテ人物等ノ打出 様アル錠鍊ヲ附シ底ニ紅緑ノ玉石ヲ嵌シテ飾リトス

壹個 壹枝 壹根 壹個 壹足 壹握 壹面 壹具 壹個 壹脚 壹個

壹具 同 同 同 同 同 壹個 壹具 壹個

一 大猷廟御寶物寫字鏡 一ハ徑四寸四分一ハ破損
 一 蠟石人形 高六寸六分缺損寛文十一年四月納
 一 竹根人形 長五寸高貳寸横臥シテ前同斷稻葉氏ノ奉納
 一 丸具 徑六寸前同斷
 一 平貝 徑八寸前同斷
 一 黒水晶珠 徑三寸前同斷
 一 青磁花瓶 松平伊豆守信綱奉納口
 一 茶辨當 前同斷高四寸六分長八寸三分
 一 鈎舟形大花生 慶安四年十一月廿日板倉周防守
 一 大水指 承應二年四月廿日船越伊豫守三郎
 一 象牙五重ノ玉 四郎奉納唐銅高壹尺徑壹尺壹寸
 一 徑壹寸五分卵殼ノ如キモノ、中ニ又卵殼ノ如キモノアリ方約二分ニシテ一六四三等ノ記點亦明カナリ寛文十一年十二月廿二日松浦伊衛門奉納

貳個
 壹個
 同
 同
 同
 同
 同
 同
 同
 壹個
 壹個
 同
 同
 同

一 同 白玉 別記ニ左ノ如ク云ヘリ
 此玉今年二月下旬淺草川上さいか淵磯際に白き物有之を川
 越領水主船に乗來て見出し船を漕よせ取捧之其時白き物は
 消うせぬ洗みれば玉のやう成ものなり其所之御代官へ捧之
 それより御勘定所に持参いたし御城に上珍しき物成ゆへ日
 光へ被遺事

壹個

一 同 鐵樹 長三尺四寸圍最モ太キ處四寸大枝三條
 此や木三浦の沖より海士取上奉行所に捧之御城にあがる是
 又日光へ被遺之事
 右二色ヲ合セテ白玉 御堂大猷院殿ヲ御藏に可被納置者也

壹株

延寶二年五月十七日
 土屋但馬守
 久世大和守
 稻葉美濃守

梶 左兵衛佐殿

件ノ書ハ當時幕府ノ老中ヨリ大猷廟ノ監督梶氏ニ宛タルモ
ノ延寶二年五月廿二日彼ノ二品ト共ニ日下部權太夫ナルモ
ノナシテ當山ニ齋ラシムト云

一大猷廟御寶物肥前こさん竹軸又長三尺六寸
銀ノ環アリ

一同 六角岩水晶 長一尺根ノ
徑五寸三分

一同 御膳具

壹 枝
壹 個
皆 具

内 譯

掛盤 金梨子地唐草高蒔
繪葵紋散銀之玉緣

本二三 三 膳
蓋共通計 卅壹個

碗類 金梨子地唐草
高蒔繪葵紋散

飯斗 同

壹 個

汁桶 同

同

菓子器

梨子地金葵紋附圓形
四寸高蓋共三寸五分徑

同

重箱 散長子地菊折枝金高蒔繪葵紋
黑塗杜丹草金

五 重 壹 組

三方 高蒔繪葵紋付

貳 膳

茶碗 減金鑲鍍口徑貳寸

壹 蓋 附 壹 具

長柄 鋤 減金唐母

壹 對

銅柄 抄 長凡貳尺貳寸

貳 本

爛鍋 眞鍮葵

貳 個

花足 葵紋子地

同

樂器 并ニ舞樂裝束別ニ目録アリ

一同 古面

卅六個

一同 古鈴

貳 個

一同 古刀

拾壹振

一同 古劔 貳尺三寸
阿蘭陀製

壹 振

一同 古硯

五 面

一輪門法親王御手元道具

内譯

御見臺 黑塗金裏菊御紋
散抽斗銀鉸鍊

御机

御料紙箱 金梨子地
高時繪

青磁床置布袋 古雅ノ陶
器ナリ

御衣桁 黑塗菊御
紋散シ

提烟草盆 唐菊御紋章透彫
唐木造銀鉸鍊

提烟草盆 唐玉文木地呂塗金泥
隠起菊御紋散銀鉸鍊

御膳具

御懸盤壹膳御四方膳四ツ組三通飯斗蓋桶等孰レモ黑塗菊御紋附
茶碗皿小皿猪口等裏菊御紋附唐草模様ノ陶器數品別ニ目錄アリ

御手巾掛 黑塗菊御
紋散シ

御手水盥 黑塗菊御紋附
附屬湯桶共

已上

數品 / 壹個 壹脚 壹個 同 同 同 同 壹個 壹品 同

一此目錄ハ寶物拜覽所ニ陳列セル品目ノミヲ列記シテ當寺并ニ附屬諸堂ノ古器什物ヲ悉皆記載セシニ非ス
一陳列ノ物品時々變換アルヲ以記載ノ列次一定ノ標準ニ據リ難シ看官之ヲ諒セヨ

一此古器什寶ハ日光山ノ沿革當寺ノ盛衰ヲ徵スベキモノ少ナカラズ故ニ今此目錄ヲ以沿革略記ノ附録ト爲

一此目錄中今ヲ距ル何年トアルハ明治二十七年迄ヲ算セシナリ

一此編纂ハ寶物拜覽所開場ノ後ニ在テ倉皇之ヲ成ス若シ誤謬アラハ他日ヲ俟テ訂正セム看官幸ニ指示セヨ

明治廿七年四月

編者如蓮謹識

明治廿八年五月 日印刷
明治廿八年五月 日發行
明治廿八年十月五日再版印刷
明治廿八年十月八日再版發行

定價金拾五錢

編纂人 榑木縣上都賀郡日光町大字日光六百八拾五番地
發行所 彦坂 謙照

發賣人 榑木縣上都賀郡日光町大字日光六百八番地
福田善太郎

印刷人 東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十六番地
島保藏

印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地
株式會社 秀英舍工場

榑木縣上都賀郡日光町大字日光

發行所 輪王寺々務所

